

第三部 大学における障害学生の支援



キャサリン・S・フィチテン

Catherine S. Fichten

Fichten, C.S. (1998). Support for students with disabilities in universities. In Koyazu, T., Komatsu, R., and Tomiyasu, Y. (Eds.). *Lectures on humans and caring: Together with people with disabilities - The front line in education, employment, and medical treatment* (pp. 183-252). Tokyo: Keio University Press.

I 障害のモデル

1 世界保健機構のモデル

一九八〇年に、世界保健機構(WHO)によって提唱された興味深いモデルを紹介したい。これは、損傷(impairment)、障害(disability)、環境的不利(handicap)を概念化するための枠組みを提供するものである。このモデルは、慢性で進行性の、あるいは不可逆性の混乱(disorder)や疾病(disease)の結果を示している。人々がある機能を果たし、期待された社会的役割を維持する能力は、おもに、その人の生活における障害や疾病の影響の程度による。

WHOモデルは、疾病↓損傷↓障害↓環境的不利の連続体を確立している。後者の三つのカテゴリーは、疾病の結果である。以下は、これらの概念を分類するのに役立つ定義である。

(1) 混乱/疾病

固有の状況で、異常の原因になる。出生時に顕現することもあるが、後に現れることもある。たとえば、脳性マヒ、脳溢血、二分脊椎。

(2) 損傷

混乱や疾病によって引き起こされる身体の構造や外見の異常。器官レベルの障害で、その有無で測定される。たとえば、脊椎損傷、手足の欠損、脳溢血による脳損傷。

(3) 障害

その損傷の結果、その人の機能遂行や活動に影響するレベルの障害。たとえば、脊椎損傷の人は歩くことができない、あるいは、松葉杖や介助がなければ歩くことができない。

(4) 環境的不利

環境に支援がないことによる障壁、不利な状況で、普通の役割の遂行を制限したり、妨げることになる。これは、損傷と障害の結果で、その人が置かれている状況による。たとえば、車椅子を使用している人は、建物に入れないという障壁に直面するが、その建物にスロープがあればその人は入ることができる。スロープがなければ環境的不利が生じるが、スロープはその不利を取り除く。これらの言葉がどのように使われるかを示すために、二分脊椎を持って生まれた人の例を使おう。

疾患は二分脊椎である。損傷は脊椎の奇形。障害は運動障害である。環境的不利は、その人がアクセスできない建物にアクセスしたい場合に生じる。もし、建物がアクセス可能であれば、環境的不利はない。

2 医療モデル

従来の医療モデルでは、その人は、病気で、治療やリハビリテーションを必要としているということが前提である。専門家は、病人が何を必要としているか知っており、その人を援助することができる。また、親切で熟練した専門家は、困窮して依存的な自分の顧客にもっとも利益になるように決定することができるということが前提である。

このモデルの観点では、障害者は病気であり、良くされることが必要であるということになる。

カナダでは、一五〇二年前には医療モデルが支配的であった。障害者は施設の中で暮らし、特殊教育学校に通い、一般的に、あたかも彼らの障害が感染するものであるかのように、人々から遠ざけられていた。これは、今では変わっている。

私は、従来の医療モデルは、障害学生にとって不適切であると思う。

3 消費者主導型モデル

消費者主導型モデルによれば、障害者は「病氣」ではなく、治療も必要ない。彼らは、自分がしたいことを知っているが、環境に支援がないために環境的不利を被っている自律的な人間である。彼らは、自立して生活し、自分の利益について決定する権利を持っている。

このモデルは、WHOのモデルの一つの帰結である。国際的に採用されているこのWHOモデルは、環境的不利は環境に支援がないためで、その人に固有なものではないという。消費者主導型モデルの基本的な前提は、人々は自分のニーズ、力、弱さに責任があり、それを知っているということである。このアプローチは、カナダやアメリカで顕著になってきた。

消費者主導型モデルは、エンパワメント、そして、その人が自分のニーズや生活を決定するということを表している。たとえ、専門家が気遣ってくれ、信頼できるとしても、ニーズが何であるかを彼らに言われるのではない。このモデルによれば、障害者は、自分自身に責任がある。これが、自己決定ということである。専門家に特定の環境的支援が必要かどうかを話すのは障害者次第である。障害者がそれを求めないときに、助言をするのは専門家の義務ではない。もし、障害者が個別ケアをしてくれる付

き添い人を必要とするならば、障害者は付き添い人を雇う。その人がそのような援助を必要とするかしないかを決定するのは施設ではない。

このモデルはまた、施設退所につながった。

消費者主導型モデルは、また、メインストリーミングも表している。すなわち、普通学級、普通公立学校、後には大学で、できるだけ制約最少の環境の中で、障害児を障害のない子と一緒に教育することである。これは、如何なる建築的、あるいは、環境的な障壁によっても子どもの学習が妨げられないことを保証するのは学校の義務であるということを意味している。たとえば、カナダでは、知的に平均的、またはそれ以上であるほとんどの身体障害児は、普通学校に通っている。彼らは障害のない子の隣に座り、一緒に勉強し、一緒に遊んでいる。

私と同じ世代のカナダの人々は、医療モデルから消費者主導型モデルに移行してきた。そのような三人の私の友人のことをお話ししよう。彼らは全員、生まれてすぐに障害を負っている。それから、事故で中途障害を持つことになった二人の友人のことをお話ししよう。

4 私の親友

一九八二年、私は、大学への障害学生の統合に関する研究を始めたが、障害学生についてほとんど知らなかった。私は医療モデルに影響されていた。障害者は「病氣」であり、施設の中で生活するべきと考えていた。障害者にとって現実はどうなのかということを探していたとき、ある人が私に一人のカウンセラー（カナダでは、教育学部で得たガイダンスカウンセリングの修士号を持っている人のことで、

私的な問題を抱えている学生にアドバイスをする者)を紹介してくれた。私は彼女に電話をしたが、電話では彼女の言うことがよく分からなかった。彼女の話し方が奇妙だったのである。結局、私たちは、レストランで会うことになった。

レストランで彼女に会いはしたが、うまくいかない。彼女は、はっきり発音することが困難であったし、私は、彼女の言っていることがよく分からなかった。私は、彼女に障害があることを知らなかったのである。後に、彼女が脳性マヒであることが分かった。しかし、最初から、彼女が修士号を持っていることを知っていた。彼女は、できる人に違いない。彼女の言うことが理解できなかつたら、分かたふりをして先へ進めることもできたが、私は、そうしないことに決めた。分からないときは、もう一度いつてくれるように頼んだ。それで大丈夫なのか、私には分からなかった。彼女がそれのように感じるか分からなかった。

私は彼女に尋ねた。「相手の言っていることが分からなかったら、もう一度言ってくれるように頼んでも平気でしょうか？ それでイライラすることはありません？ 私は分かたふりをして、会話を続けるべきなのでしょう？」

彼女は言った。「分かたふりをされるのは嫌です。私は分かたふりしてもらいたいのです。私の話し方が理解しづらいことは承知しています。分からないときは聞いて下さい。途中で話を取ってしまうことはしないで下さい。分かたふらないのに分かたふったと思わないで下さい」

これが、今に至るまで一五年間続いている友情の始まりだった。私の友人は、今では、専門的なガイダンスカウンセラーとして働いている。彼女は、ヨットを操り、車を運転する（私は彼女が車を選ぶのを手伝った。食べることも好きである。私たちは、しばしば一緒に夕食をしに行く。彼女と話すと

き、私たちは、単に、一緒に楽しいときを過ごしている二人の女性だ。

ラムバート博士は、最近亡くなられたのだが、数学と心理学の博士号を持っていた。彼とは数年前に知り合った。彼は、コンコルディア大学で教鞭をとっていたが、そこは、私が通っていた学校である。彼は、私の同僚であり、素晴らしい人だった。彼は、全盲だったのである。

今や四〇歳代のある女性は、一八歳のとき、ドーソン大学で私の学生だった。彼女は、学習障害で、書字が困難である。彼女には重複障害がある。難聴なので、彼女は、補聴器（聴覚補助器）を使い、読唇をしなければならぬ。また、筋肉の状態の悪化が進行しており、今や、片腕しか使うことができない。歩行も困難で、慢性疲労なので、電動車椅子を使用している。彼女は、修士号を持ったソーシャルワーカーで、現在、私の研究の助手だ。

三人とも私と同年代だから、医療モデルの下で生活を始めた。このうち二人の女性のカウンセラーとソーシャルワーカーは、障害児のための特殊教育学校に通ったが、受けている教育が、障害のない子が受けている標準的な教育には及ばないことを知った。また、二人とも、卒業後は庇護授産所に行くことになっていった。

カウンセラーである脳性マヒの友人が私にいった。「授産所に行かせて、紙の花を作らせようとしたのよ。私がどんなふうにするかと思っていたのかしら。私の手は震えてしまうのね。私は、きつと上手な花は作れなかったわ」

ラムバート博士と話したとき、私は、彼の経験がいくぶん変わっていることを知った。彼は、盲の学生のための学校に通った。一五年前、盲人は、ピアノの調律師か藤椅子作り（野草の一種である籐を使つて椅子の座席部分や背もたれを編む）になることを期待されていた。これらは、北アメリカでは盲人のた

めの伝統的な仕事だ。日本にも、按摩のような、盲人のための特別な仕事があると思う。ラムパート博士は、ピアノの調律をするための音楽的能力は持っていなかったもので、藤椅子作りになることになっていた。しかし、彼には、博士号レベルの数学者と心理学者になる知性、根気強さ、能力があったのである。

一五年以上前、障害者は、普通の教育や普通の仕事を得るために闘わなければならなかった。私の三人の友人は、各々、信じ難いエネルギーを持っていた。彼らは、自分から施設を出て、夜間高校や通信教育で高等学校の課程を修了した。そして、学業成績に基づいて大学入学を認められたのだが、この立場を得るまでに長い時間がかかった。彼らの学校時代に私たちがメインストリーミングをしていたら、彼らはこんなにも闘わなくてすんだであろうに。

こんな可能性を考えてみてほしい。友だちとスキーに行つたとしよう。滑るにはもってこいの日である。雪質は良いし、太陽も輝いている。本当に楽しんでた。そのとき、誰かが突進して来て、自分と衝突した。次の朝、病院で目覚めた。そして、動くことができなくなっていた。これは、私の友人に起こったことである。彼は、首から上しか動かすことができない。四肢マヒになってしまった。そのとき、彼は、一八歳で、大学一年生だった。

彼は、現在、カナダでは、非常に社会的地位の高い職業の公認会計士である。彼は、口にくわえた棒でコンピュータを操作する。また、ヨットを操りもする。私たちは、一緒にレガッタに参加した。彼のヨットは、「sip and put」と呼ばれる仕組み、すなわち、機械につながっている管に向かって息を吹き込んだり吸い出したりすることによって、ヨットのさまざまな操作を行うものを備えている。彼は、自分でヨットを操り、レースに出場することができるのである。

もう一人のかつての私の学生は、商学士号を取得したが、彼は、その前にオートバイに乗っていると、事故に遭つた。オートバイがスリップし、気が付いたときには、腰から下を動かすことができなくなっていた。彼は、今、車椅子を使用している。彼は、税務署員をしているので、私は、所得税の払い戻しに関してアドバイスが必要なときは、彼に聞いている。

これら二人の友人は、青年期に障害者になった。障害を負ったとき、彼らは、障害者について他の人々と同じような見方をしてきた。障害者に気詰まりを感じていたし、障害者に何とすべきか分からなかった。彼らは、障害者についてさまざまな否定的な考え方を持っていた。無能、障害、弱さ、限界のような考え、すなわち、私たちと同じような考え方である。彼らは、障害のない者についての気持ちと比べ、障害者と親しい関係にはなろうとしなかった。多くの他の人々と同様に、彼らも、「そのような人々」が同じ国で暮らすことは結構だが、「私の兄弟とは結婚して欲しくない」と感じていたのである。

多くの他の障害者と同様に、彼らも、事故で障害を負った後、そんなふう生きていくより死んでしまいたいと思つた。そのようなショックな事故に遭つた人々は、普通、適応するまでに約二年はかかる。しかし、彼らは、そのような人生も、まだ、享受できるものを沢山持っていると感じるようになった。

障害のない者の考えとは対照的に、障害者は、その障害が先天性であろうと後天性であろうと落胆してはいない。障害者のうつ病発病率は、障害のない者と変わらない。自分自身を如何に高く考えるかという障害者の自尊心も障害のない者と変わらない。如何に自分の人生に満足しているか、自分の生活の質がどうか、朝、目覚めることをどのくらい楽しみにしているかという人生に対する満足度を測つたと

きも、障害者と障害のない者の間に違いはないのである。

障害のない人にとって、自分を障害者の立場に置くことは、ほとんど不可能である。たとえ、今は、目が見えなくなるくらいなら死んだ方がよいとか、マヒになるより死んだ方がましだと思っただけでも、実際にそうなってみると、そんなふうには思わないだろう。障害者にとって人生はそんなに悪くない。生活してみなければ、生活の質を判断することはできない。外部からその人の生活の質を判断することはできないのである。

Ⅱ 障害者に対する態度

カナダにおいて、障害者にとってのおもな障壁は、人々の態度である。一般的に、カナダでは、障害のない者は、障害者について矛盾する態度を持っている。私たちは、人は自分より不幸な人を助けるべきであると考えている。一方、力、美しさ、できるということを重ねる。障害者に会ったとき、私たちは、二つの相反する見方をする。一方では、「ここに自分が持っているものを持っていない人がいる。だから、私は、助け、気遣い、慈しむべきである」と見る。しかし、もう一方では、「ここに弱くて、美しくない自分より劣っている人がいる。だから、この人は価値が低い」と考えたりする。

研究論文によれば、九〜一〇歳までの子どもは、普通、障害者をかなり受け入れる。カナダの子どもは、ショッピングセンターや道で松葉杖や車椅子を使用している人を見ると、その人のところへ行つて言う。たとえば、松葉杖をついている人になら、「どこが悪いの？ どうして歩き方がおかしいの？」

と、車椅子に乗っている人になら、「車椅子を押されるのはどんな感じ？ ひざの上に乗ってもいい？ 面白そうだ」と話しかけるものである。子どもは、損傷や障害を怖がらない。好奇心が強いのである。一方、一〇歳代では状況が違ってくる。一一〜一五歳頃の若者は、人生で成功する唯一の道は、他の人々と同じであることだと感じ始める。普通学校に通っている障害児は、一〇歳代になると、他の子どものようなのでみじめな思いをする。人に合わせようとするが、それは難しいことである。大学生になるまでに、彼らの態度は、再び寛容になる。この変化のサイクル、子どもの頃の好意的で好奇心旺盛な態度から、一〇歳代の同じであることに対する関心、大学生のより受容的な態度への変化は、多くの研究で見られてきた。それは、メインストリーミングプログラムをいつ始めるべきかということについての示唆を含んでいる。障害児を障害のない子と一緒に学校に統合させる場合、研究は、統合が行われる年齢が、統合の成功に影響するということを示唆しているのである。

北アメリカの文献では、ほとんどの研究が、女性は、一般的に、障害者に対して、男性よりやや肯定的な態度を持つということを示している。また、高い教育を受けた人は、障害者に対して、教育程度の低い人より肯定的な態度を持つ。障害者に対してもっとも受容的なグループは、教育学、ソーシヤルワーク、心理学、社会学を含む、社会科学を専門とする大学生である。これらの分野の学生や教員は、普通、障害者に対して、工学、理学、経営学の学生や教員より受容的な傾向がある。

否定的な態度や社会的不安の原因は何なのだろうか？ 多くの人々は、それを以下のように説明している。

(ア) 私たちは、弱い人々の価値を引き下げる。私たちは、自分の死が恐ろしい。そして、障害者を見ると、それが自分にも起こり得るといふことが思い出され、そうなることが恐ろしい。

(イ) 私たちは、障害者に対して何を言うべきか、何をすべきか分からない。

(ウ) 私たちは、その障害を負うとはどんな感じかということについて興味がある。しかし、尋ねる勇氣はない。聞くのは失礼ではないかと思ってしまう。

多くの研究によれば、被験者からは障害者が見えるが、障害者からはその被験者は見えないうちに、障害者をマジックミラーの後ろに立たせると、被験者は、その障害者をじっくり見ようとする。障害者が被験者を見ることができる状況では、その被験者は、障害者を見ようとはしなくなる。普通の社会的な遭遇において、私たちは、自分の好奇心を満足させる機会がない。それは失礼なことだと思っているからである。だから、人々は、自分の好奇心を隠すことに精力を使い、障害者に対して非常に臆張った振る舞いをしてしまう。

かつて、私は、義手を付けている女性と会ったことがある。私には、それは奇妙に見えたが、彼女にとってもっとも大事な部分のように思われる彼女の腕について何とすべきか分からなかった。それを無視すべきなのか？ それについて触れておくべきなのか？ 彼女が義手を付けているということについて何をすべきなのか？ 私は考えた。「どうしようか？ 何か言おうか？ それとも、何も言わないでいようか？」そして、そのことについて一生懸命考えていたので、私は、そのとき聞きたいことがあったのだが、彼女の言葉のほとんどを聞き損なってしまった。

(エ) 私たちは、障害者に慣れていない。そして、障害者は、さまざまな点で私たちと違う、しかも、そのほとんどが否定的な違いであると思いついでいる。私の研究結果によれば、障害のない者は、障害者は、落ち込んでおり、自尊心が低く、自分とは違う興味や関心を持っていると思いついでいる。私たちは、障害者は、車椅子に乗っている人は他の車椅子に乗っている人と一緒に、盲人は他

の盲人と一緒にいたいだろうというように、「自分と同じような人々」と一緒にいる方が好きであると思いついでいる。何故なら、その方が気楽だからだ。

障害者は、このどれにも当てはまらない。私は、障害学生に対して研究を行ったが、障害者について私たちが抱いているこれらの思い込みは、一つとして正しくなかった。にも拘わらず、これらの思い込みは、カナダにおいて、広く行き渡っているのである。

Ⅲ 障害者に対する態度の変化

障害者に対する態度を変化させるために何がなされてきたのだろうか？

1 法律

アメリカには、人種差別に抵抗してきた長い歴史がある。アメリカでは、一九五〇年代まで、黒人は肌の色だけで差別されていた。こうした差別をなくす動きが出てきたのは、一つには、法律と関わりがある。法律は、人々の態度を変化させる重要な手段の一つである。もし、人に差別することは法律違反であると言え、ほとんどの人が差別を止めるだろう。私たちのほとんどが、法律を遵守する市民である。私たちは、何が正しい振る舞い方であるかということについて立法家や政治家に倣っている。

2 役割演技

態度を変化させるためのもう一つの方法は、役割演技である。北アメリカの障害学生の間で非常にポピュラーなことに、「感作の日 (sensitization day)」がある。これは、運動障害のない人に車椅子に乗ってもらい、視覚障害のない人に目隠しをしてそこから辺を歩いてもらう、聴覚障害のない人に耳栓をして授業を受けてもらうというものである。この種の経験は、非常にポピュラーである一方、恐らく、障害者についての「できない神話」につながってしまう。この種の経験をした障害のない者は、ついには、障害者のことをとてもかわいそうだと感じることになる。この経験では、障害のない者が、障害者は多くのことができるという態度を発達させることにはならない。

私は、娯楽場に行った。ちよつとした「びっくりハウス」のようなものである。私は、真つ暗な場所に連れて行かれた。参加者全員は、さまざまな経験をさせられる。壁に触り、表面の手触りを感じるのである。これが、先に述べた感作 (sensitization) 体験と違うところは、盲人ツアーがあるということである。この人は、「ここを歩きましょう。指を右側に置いて下さい。手触りが変わったら、すぐに右に曲がることになります。あの小さな音が聞こえますか？ 水の音が聞こえますか？ 私たちは、小さな橋を渡っているところですよ」などと語ってくれる。

この暗闇の場所では、レストランに行くとき、盲のウェイターが給仕をしてくれる。私たちは尋ねた。「あなたは、どの味のポテトチップスを出しているのかをどうやって分かるのですか？」「コーラなのかジンジャーエールなのかをどうやって分かるのですか？」「お金をいくら受け取ったかをどうやって分かるのですか？」——そのウェイターは、障害者が、どのようにできないのかではなく、どのようにしてできるのかを話してくれた。

それは素晴らしい経験であった。障害者の弱いところや限界について話すのではなく、対処方法について教えてくれたのである。障害者はしっかり対処している。その盲人は、私がどこに^①いるか、どのようにお金を数えるか、どのように食べ物給仕するか、どのように方向を知るかを話してくれた。私は、闇の世界が分かり始めた。私は、それが恐ろしくはないことを学んだ。それが違う現実であることを学んだ。人々ができるし、しっかり対処している。

3 情報提供

人々の障害者に対する態度を変化させるためのさらにもう一つのタイプの活動は、情報の提供に関わることである。情報は、二つの方法で提供され得る。専門家から障害についての講義を聞くこと、障害者から自分の状況についてどう感じているかを聞くことである。研究によれば、普通、専門家に情報を提供してもらうことは有効だが、人々の態度を変化させるには特に有力な方法ではない。障害者に自分がどのように対処しているかを説明してもらう方がより強力な方法である。

4 接触

肯定的な態度を育てるための非常に興味深いもう一つの方法は、障害のない者に障害者と接触してもらうことである。しかし、これは、正しく使われないと、非常にもろくなり得る方法でもある。も

し、盲人が、授業で障害のない者の隣に座ったが、二人はお互いに一言も喋らないということならば、障害のない学生の態度は変わらないだろう。また、障害のない学生が、盲の学生のヘルパーとして、読むのを手伝ったり、食事するのを助けたりなど、つまり、相手よりも優位者として振る舞うならば、自分より劣った者を助けることはできるだろうが、これも大きな効果はない。

接触を利用したもつとも効果的な方法は、同等な立場を基礎とした、障害者と障害のない者との長期的な接触である。私の学生に、ある活動、たとえばデータを集めるといったことが困難な人がいる。また、別の学生は、視覚障害がなく、データを簡単に集めてくれることができるが、たとえば、コンピュータは盲の学生ほど上手ではない。このとき、私は、一つのプロジェクトで二人の学生を一緒に働かせる。そうすれば、彼らは、お互いの技能や能力を補い合うことができる。これをする、最初に、障害のない者たちは、「自分が『できない人』に協力しているので、この授業で何かを達成したり、良い成績を取ったりすることは難しいだろう」と不満を言う。しかし、障害学生と一緒に働いた後は、これを体験した人すべてが意見を変化させる。二人の学生が一緒にいるとき、彼らは、協力し、解決を見いだす方法を見つけないければならない。人々は、自分の相手の強いところや弱いところについて学ぶのである。

接触は、一般的に、態度の変化に役立つように同等な立場に基づく、長期的なものであるべきだ。そして、人々は、隣に座り合っているだけでなく、お互い両方にとって重要な課題を共有すべきである。

IV 高校後の教育と障害者

北アメリカの大学において、障害学生の入学人数は、過去一〇年で非常に増加している。しかし、今までのところ、障害学生の卒業人数は、あまり変わっていない。多くの障害学生にとって、大学の課程をすべてこなすことは不可能であるからだ。それができる人もいれば、障害のない学生と同じだけ多くの講義を取ることができない人もいる。この理由として、障害学生は、しばしば同じ課題をやり遂げるのにより長い時間がかかるということがある。彼らは、改造された交通手段やヘルパーを待たなければならぬ。データを入力するのに、一〇本の指ではなく、一度にコンピュータの一つのキーでしか入力できないかも知れない。これらのさまざまな遅れによって、障害学生は、同級生よりいくぶん年上であることが多い。

最終的に、これらの学生が、大学を卒業できれば、大卒の障害学生の数も大きく増加するだろう。そのとき、北アメリカでは、障害者のためのサービスを提供する方法は変わっていくだろう。何故なら、そこで初めて、良く教育された、考えをはっきり述べられる大卒者が出て、彼らは、社会政策の変化を推し進めるだろうから。私は、その日を楽しみに待っている。

法律と技術の前進は、環境的、物理的な障壁を乗り越えるためのより良い手段を提供し続けている。それによって、障害学生は、大学の中でも外でも、コミュニティ生活すべての側面で、より活動的になる。しかし、多くの目に見えない障壁が残っている。今や、効果的、積極的にこれらの残っている障壁に取り組みるときである。否定的な態度、誤った信念、非現実的な考え、厄介な感情、感情を傷つけるよ

うな差別的行為を変えるときである。何故なら、これらの隠れた障壁は、障害学生の成功や失敗にとって極めて重要となり得るからである。変化は、大学の中でも外でも必要である。これには、教員、障害学生にサービスを提供する人々、研究者、雇用主、産業や政府レベルの政策決定者が含まれる。もちろん、何よりもまず、学生、障害のない学生と障害学生も含まれる。

高校後の教育は、障害者にとって、障害のない者と同じ理由で重要である。それによって、個人の目標実現を助け、就職市場で効果的な競争ができ、自立と経済的安定につながる。

研究は、大学教育が、障害者にとってより重要であることを示している。カナダにもアメリカにも、今や、障害の有無に拘わらず、失業者がいる。障害の有無に拘わらず、高度な教育を受けた人ほど、より良い就職の機会が与えられる。大学教育を受けた障害者は、そうではない人より良い生活、自立した生活、就職の機会が与えられる。つまり、研究は、大学教育が、誰よりも障害者にとって重要であることを示しているのである。さらに、いったん、障害者が大学に入学すると、障害のない者と同じ割合の人数が卒業する。

大学教育は、学問の修得以上の目標をかなえる。たとえば、研究によれば、大卒の障害者は、そうではない障害者より仕事に満足し、その仕事を長く続けており、仕事を見つけるのに時間をかけなくて済む。しかし、すべての教育レベルで、無職率は、障害のない者より障害者の方が高いので、大卒の障害者の就職状況は、決して素晴らしいものではない。それにも拘わらず、大学教育の効果に関するデータは、非常に勇気づけてくれる。

V 大学における障害者にとっての隠された障壁

障害のない人々が持っている、「障害者はできない」という狭い前提は、事実無根である。そのことを示す一つの方法は、障害者に高校後の教育を修了する機会を提供することである。それは、私たちが、障害学生を障害のない学生と同じように扱うということではない。平等なアクセスと機会を提供するということである。

もし、その人に身体障害があり、建物にはスロープがなく、入り口に段差があり、それと格闘しなければならぬならば、「入ってきてください。扉は開いていますから」とだけ言うことはあまり意味がない。それは平等なアクセスではない。その代わり、私たちは、環境的不利のある環境や達成にとっての社会的障壁を除去し、障害学生が、できないことではなく、できることを示せるようにすることによって、彼らに達成する機会を提供すべきである。

大きく、さまざまな隠れた障壁によって、障害学生は、大学に通い、大学でうまくやっていくことが困難になっている。

障壁には、個人の障壁、システムの障壁（社会の側）が含まれる。それらは、大学の管理者、教員、サービス提供者、政府の政策決定者、公的組織、民間企業、家族、医学界、障害学生、障害のない学生を含むさまざまな人々の態度、価値観、信念、考え方、感情、行為を反映している。

1 大学の障壁

多くの点で、大学の障壁はもつとも重大である。大学は、障害学生が受験するのをあきらめさせ、障害学生が克服できないような物理的、あるいは、入学の障壁を置き、障害学生や彼らを教える教員が必要とする備品、サービス、設備への素早いアクセスを提供していない。大学は、「自己充足的予見 (self-fulfilling prophecy)」をくり出し、「障害学生は、大学に歓迎されていない」というメッセージを伝えてしまい、それによって、ほとんどのダメージを引き起こす。

北アメリカでは、問題は、しばしば大学の無関心である。障害学生は、管理者の優先事項から外されている。管理者は、わずかな障害学生のために、大学に多大な費用がかかると不満を言う。もつと優先すべき事項が他にあるというのである。彼らは言う。資源は乏しいし、それは大多数のためのものだ。障害学生のために、新しく勉強に必要なサービスを提供しても、使われないかも知れない。それゆえ、こう主張するのである。「ケースバイケースでやっていきましょう。障害学生の権利の発達を促進することについては急ぎ過ぎないようにしましょう」と。

この種の論理は、最初は、納得せざるを得ないもののように思われるが、非常に近視眼的である。サービスや設備が乏しければ、入学する障害学生は、ほとんどいなくなってしまうだろう。障害学生がほとんどいなければ、大学は、政府に予算を申し込んだり、企業に寄附をお願いしたり、設備を改善するためのお金を得たりする努力をする必要を感じなくなる。ほとんどの学生がその設備を使わないからである。外部からの資金がなく、設備やサービスが乏しいので、入学した障害学生は、うまくやっていくことが困難になるだろう。障害学生がうまくやっていけないということは、管理者の元々の立場を正當

化してしまう。管理者の立場というのは、現状維持である。

ケースバイケースでやっていくことは、ときに、受け入れられる。その人に合わせて扱ってもらうことが常に必要な学生もいる。しかし、長期的には、障害学生のためのサービス、設備、備品は、大学の正規のサービス提供システムの中に統合されなければならない。たとえば、私が教えている大学では、視聴覚サービスが統合されている。ろうの学生は、普通、ビデオの音声で文字で読めるように、字幕付きのビデオテープが必要である。これらの字幕を見るための特別な装置が必要な学生は、私が講義のために装置を借りると同じところでそれを借りることになっている。「障害用の特別な視聴覚サービス」はない。

盲や弱視の学生は、盲あるいは視覚損傷のある学生用に録音されている本を聞くために、特別なテープレコーダーが必要ならば、視聴覚部から装置を借り出すことができる。普通のコンピュータラボで、コンピュータを使って宿題をしたければ、合成音声で喋るコンピュータや非常に大きな文字で文章を表示するコンピュータもある。大学の図書館では、カード目録がメインコンピュータに入っており、簡単に利用することができる。私たちは、可能な限りすべてのところで、他の学生に提供されているサービスのメインストリームの中に障害学生を統合することに役立つサービスを試みてきた。学生が、これらのサービスや装置へのアクセスを持つことは、彼らの権利である。それは、私たちが認めている特権ではない。

2 消極的な差別

今度は消極的な差別の例である。大学の管理者は、このようなことを言うかも知れない。「建物の改造をしたり、特別なサービスや備品を提供したり、特別なサービスの提供者やスタッフに給料を払ったりすることにお金がかかるから、『彼ら』にここへ来るように勤めてはいけない。たとえば、二人の障害学生でも、新しい問題を引き起こすし、今ある日常を崩壊させる。入学の基準もいくつかわえないければならない。変えなければならぬカリキュラムも出てくる。授業によっては、アクセスできない教室からアクセスできる教室に移動しなければならなくなる。それは教室の掃除人や教室の割り振りをしている係に問題をもたらす。教員は、授業が、長年教えてきた教室から違う建物に移動してしまうと不満を言うだろう。大学は既にいっぱいなので、授業をアクセス可能な建物に移動させるための場所を見つけないければならない。どのように障害学生を扱うかということスタッフや他の学生に教えなければならぬ。安全の問題や火災のときの規定はどうしよう？ 障害学生は、卒業するのに長い時間がかかるので、学生を早く卒業させるといふ私たちが傲慢にしている統計が台なしになってしまうだろう」

そのような近視眼的な、しかし、一般的に言われる見方は、積極的に止めさせるべきである。このような消極的な形の差別に対する最良の解決方法は、政策決定者に対して、大学は学生に奉仕されるころではなく、奉仕するところであるということを中心かつ強力に思い出させることである。

感覚的、肉体的能力を特に必要とするプログラムについてはどうだろう？ 視覚障害のある学生は、医者や電気技師になれるのだろうか？ 難聴の学生や車椅子を使用している学生は、看護婦になれるのだろうか？ 沢山の人が、これらの職業で成功しているにも拘わらず、多くの大学は、このような同

じ質問をし続けている。盲の医者もいれば、ろうの技師や車椅子を使用している看護婦もいる。実際に、ほとんどあらゆる職業には、ほとんどあらゆる損傷や障害のある人々がいるのである。

自分を消極的な門番であるとみなしている人がいる。彼らは、門戸を閉ざし続けることが自分の仕事であると思っている。私の同僚の一人が言った。「たとえば、その学生が卒業するとしても、私たちは、たぶん、そのような障害のある学生の入学を認めることはできないでしょう」。それが四、五年遅れるだろうということをおいて欲しい。言うまでもなく、三、五、一〇年遅れるからといって、人々が学ぶ機会を拒絶することは、大学の役割ではない。

身体障害のある学生が、完全に、大学にアクセスできるようにするために、そして管理者やその他影響力のある人々を説得して、学生、教師、サービス提供者が生活しやすくなるような変化をさせるためにも、やるべきことがまだ沢山ある。

3 教員に関連した障壁

大学の障壁は、障害学生が克服しなければならないものだけではない。教員もまた、彼らにさまざまな問題をもたらす。教員は、より大きなコミュニティのメンバーなので、社会の人々と同じ態度を持っている。他の人々と同様に、彼らの多くが、障害学生に初めて会ったとき、気詰まりや不安を経験する。しばしば彼らは何と申すべきかわからない。障害学生にとって何が効果的な教育技術なのか分からない。盲の学生にどのように解剖学を教えるのだろうか？ 脳性マヒの学生にどのように化学を教えるのだろうか？ 黒板に数学記号を書くとき、盲の学生をどのように扱うのだろうか？ 「見る」、「聞く」、「歩

く」といった言葉をそれに関係する障害のある学生に使っても大丈夫なのだろうか？ 教員は、助け過ぎてしまう、あるいは、助けなさ過ぎるのではないかと心配する。

「私のクラスに盲の学生がいます」。物理学の教授が、かつて、私に言った。「私は、準備をするために、早めに授業に行くことにしています。私は、学生が白杖で机や椅子をたたきながら歩いてきて、授業中にノートをとることができるようコンピューターの電源をつなげる席を探しているのを見ました。私はどうするべきか分かりませんでした。歩く道に机や椅子があるかどうかを彼に知らせるべきなのか？ 席を探すのを助けるべきなのか？ それとも、彼は、自立していると思っっているから、助けられないくないのだろうか？ この状況で、私は何をすべきなのだろうか？」

私は、彼にその日はどうしたのかと尋ねた。彼は答えた。「その学生に私がそこにいると分からないように、問題に直面しなくてもすむように、静かに息を殺していました」

私は、正しい答えは明白であり、そして、それは、その教授がしたこととは違うと思う。その教授は、その学生に「今日は。私は、今日、早くからここにいました。席を探すお手伝いをしましょうか？」と挨拶すべきであった。そうすれば、学生は、どんな援助が必要なのかを教授に話してくれただろう。

教員もまた、障害学生のニーズに合わせるという問題を抱えている。中には、ノートをとることが難しい学生がいる。読唇をする人もいれば、盲で、ノートをとるための機械を持っていない人は、講義を録音したりする。しかし、教員によっては、テープに録音されることを不快に思い、録音されることに気を奪われる人がいる。

障害学生をかわいそうだと思う教員もいる。その学生が勉強できない場合、そのような教員は困ってしまう。「単に、授業に出るだけでも困難な学生に、どうして悪い成績をつけることができるだろう

か？」

学生を失望させ、狼狽させるような否定的なメッセージを伝える教員もいる。そのような教員は、障害学生は成功できないと本当に思っている。そして、このようなことを言う。「何故、私の授業に出るのですか？ あなたは盲ですね。どうやって歴史を勉強するのですか？」答えは、もちろん、教員は、学生のために狭い前提を持つべきではないということである。学生は、それが歴史の授業であることを知っているし、そのような授業に出席することによって何が大変なのかを分かっている。

健康状態によって、学生の障害が、具合の悪い日もあれば、良い日もある。たとえば、関節炎の学生には、具合の悪い日と良い日がある。多発性硬化症の学生も、具合の悪い日と何の問題もない日がある。私たちが「目に見えない障害」と呼んでいるもの、学習障害のような障害のある学生や、障害を隠すことができる学生、たとえば、読唇の上手な聴覚障害の学生もいる。教員の中には、その学生が日常的に苦労していることを知り、あるいは、実際に障害を見ることができなければ、その学生に本当に損傷があるということを信じない人がいる。彼らは、その学生を信用せず、問題をでっち上げているのだと思っ込んでいます。

教員は、多くの役に立たない、有害なことをしてしまう可能性がある。彼らは、援助し過ぎることがある。たとえば、障害学生の提出した課題が標準以下であっても、それを受け入れたり、簡単に成績をあげたりしてしまう。理由もなく、寛大な調整をしてしまうのである。他の学生は満たさなければならぬ必要条件であるのに、障害学生には満たさなくてもよいことにしてしまうこともある。これらの行為は、すべての学生の教育の価値を引き下げてしまう。

つてもっとも良いやり方は、障害学生が心配事を克服し、学業で成功するのを援助するような調整について教員と話し合うために教員に接触することであると思っている。一般的に、私の研究結果によれば、(ア)問題は、起こる前に話し合われるべきである。

(イ)学生の要求が漠然としている場合、調整もまた、曖昧で役に立たないものとなる。

(ウ)要求が具体的に詳細であるほど、教員も学生も満足する。

数年前、私と同僚は、教員と学生のより効果的な関係作りを支援するために、二つのガイドを作成した。一つは学生用、もう一つは教員用である(富安、小松、小谷津、一九九六)。二つのガイドは、一〇〇名を超える障害学生と、彼らを教えている数百名の教員に関する私たちの研究に基づいている。

ガイドが書かれたのは数年前であり、その当時の状況を反映している。たとえば、医学上の問題がある学生や学習障害の学生に関する項がない。技術の項では、現在のコンピュータや情報技術の改善に関して、最新というわけではない。しかし、ガイドの中でなされている奨励や示唆は、今日でも十分通用するものである。

教員はまた、障害のない学生についてもさまざまな心配をする。障害学生に調整を行えば、障害のない学生は、そのことを良く思わないのではないか? 全員に公正であるかどうか心配だ。教員が、学習障害のある学生に試験時間の延長を認めると、その学生を援助し過ぎて、その他の学生が不利になるのではないか?

しかし、障害学生に調整を行うということは、その他の学生と同等な教育経験を提供するというだけのことである。他の人々以上に有利にすることもなければ、障害のない学生を不利にすることもない。調整によって、できないのではなく、できるのだということを学生に示せなくしている障壁を取り

除くことができる。

障害学生は、ときに、障害のない学生ができないことをすることができる。

教員も人間であるから、他の人々と同じように怠けるときもある。障害学生に調整を行うために、講義のカリキュラムを修正することは、余分な努力と時間を必要とする。授業の調整を行うためには、その学期の授業の開始前に、授業の概要やその他の教材を用意しなければならない。配布資料もきちんと用意しなければならない。前もって計画を立てなければならず、土壇場になって用意することはできない。試験は、盲の学生用にテープに吹き込む時間が必要なので、さらに前から用意しなければならない。また、障害学生が、試験問題を読んでもくれる人、あるいは、その学生の答えを書いてくれる人と一緒に試験を受けられるように、前もって特別な手配をしなければならないかも知れない。

教員というのは一つの職務である。学生のニーズに敏感であることも教員の職務である。以前より早く教材を用意することが職務の一部になってしまえば、その職務はそういうものだということになる。障害のない学生も、宿題や授業の資料を前もって渡されればありがたく思うだろう。

もちろん、教員は、単に、悪い教師であることがある。黒板に向かって話す。黒板の字が汚い。ぶつぶつ喋る。この種の教員は、障害学生にとって非常に困る。恐らく、日本の教育システムは北アメリカより優れているので、そのような教員に教わったことはないと思う。私はあるし、また、そのような人を沢山知っている。

教員の中には、唯一の平等な扱いとは、まったく同じ扱いである、という誤った信念に基づいて行動し続けている者がいる。彼ら側のこの信念は、先見性、創造性、想像力の驚くべき欠如を示している。

4 政府やその他の公的組織による障壁

障害学生にとってのもう一つの障壁は、政府や公的な資金援助を受けている組織によって引き起こされる。私は、先に、障害のない人の障害を持つ人に対する態度の変化と、障害学生の成功の鍵は、しばしば法律であると言った。たとえば、アクセス可能性に関する法律、差別と就労の平等に関する法律、障害学生のために高校卒業後の教育をアクセス可能にすることに關する法律といったものである。

カナダには、アメリカの障害を持つアメリカ人法（ADA）のような包括的な法律はないが、もちろん、アメリカに普及している精神や態度は、カナダでのそれに影響する。カナダには、権利と自由に関するカナダ人憲章がある。それは、「すべての人は、法のもとで平等であり、差別、特に、人種、出身国、民族、肌の色、宗教、性別、年齢、精神障害や身体障害を理由とした差別をされることなしに、法の平等な保護や利益に対する権利を持つている」といつている。つまり、障害者は社会の片隅で生きていく人ではない。

時間は、障害学生にとって非常に重要な概念である。障害者は、本を読む、学校に通う、講義ノートを写す、レポートを書くといった多くのことをするのにより長い時間がかかるので、他の学生より一生懸命勉強しなければならない。しかし、彼らを支援するために設けられた組織や構造が、実際には、しばしば一層の負担となっている。物事をゆっくり処理するという特定のしきたりに従わなければならない官僚は、必要な支援を提供するのが遅過ぎ、しかも不十分である。今必要な装置や教科書が、三か月遅れて支給されたら、学生が落第するのは必定である。

前述のように、過去、カナダでは、医療モデルが主流であった。このモデルの中で働いている善意の勤勉な人々は、しばしばサービスを受けている人々の最善の利益のために働くことができなかった。自己擁護の活動をしている障害者や、サービス提供に対して消費者主導型モデルによるアプローチをとっているグループと話し合うことができなかったため、彼らは、ときに、障害者から市民権を剥奪し、障害者にとって非常に重要なこれらの事項に取り組むことをしなかった。一般的に、医療モデルは、人々の能力や市民権を剥奪する。それゆえ、強い無力感や依存心を育ててしまい、ますます、このモデルが正当化されてしまった。

政府の予算案、政策、資金給付方式もまた、障害者を大学にパートタイムでもフルタイムでも、通えなくさせる障壁となる可能性がある。たとえば、これらの公的な行政的障壁によって、障害者は、援助者と一緒に暮らすことができなくなる。これらの近視眼的な財政的障壁は、生活のアレンジ、交通機関機器、サービス提供などさまざまな領域に悪影響を及ぼしている。「庇護授産所的姿勢」に従うことによって、また、障害のある人に自分のために何かしてもらおうより、こちらがその人のために何かしてあげる方が安上がりで良いと信じて活動することによって、政府、団体、サービス提供者、機関は、長期的な損失と引き換えに短期的な利益を得ているのである。

カナダの大学には、「サービス提供者」と呼ばれる専門職員がいる。これは、障害を持つアメリカ人法から生まれた、比較的新しい専門である。各大学には、障害学生が適切なサービスを受けることを保証することに責任を持つように任命された人がいる。この仕事をする人々は、きちんとしていて勤勉であることが多く、障害学生の福利を推進することに献身している。研究によれば、これらの人々は、障害について社会の人々より好意的な態度を持っており、障害学生が成功することを心から切に望んでいる。

しかし、サービス提供者の中には、少々熱心過ぎて、援助をし過ぎてしまう人がいる。彼らは、学生の成功を自分の成功と、学生の失敗を自分の失敗とみなす。障害学生の世話を焼き過ぎ、自己擁護技能の発達を助けることにならないので、学生に益ではなく、害を及ぼしてしまう。

反対に、援助が少な過ぎることもある。援助が少な過ぎる理由は沢山ある。サービス提供者によって、障害学生が人生の厳しい現実から守られると、それは、その学生にとって仇になってしまうと考えられる。今の苦勞は、後に大きな利益になると信じているのである。サービス提供者が、大学の中で無力である場合やこの仕事に熟練していない場合もある。大学によっては、学生を援助することに関心があるというだけの教員や登録者不足で休講になったために時間が余っている教員が、サービス提供者をしているところもある。

コンサルテーションのモデルに賛成し、それに従って、学生の心配を取り上げて上層の人に伝えるのではなく、上から指示を受けてそれを学生に伝えることを仕事にしている場合も、援助が少な過ぎることになる。官僚の要請にはまって動きがとれなくなる人もいる。如何なる理由があろうと、援助が少な過ぎるサービス提供者は、目に見えない障壁の主要な源なのである。

5 他の学生による障壁

もう一つ障壁の源となり得るものは、他の学生、すなわち、障害のない学生である。教員と同様に、障害のない学生は、社会の人々の態度を共有している。他の人々と同様に、障害学生に初めて会ったとき、彼らは不安になり、何とすべきか、何をすべきか分からない。他の人々と同様に、「見る」

「歩く」、「聞く」といった言葉を使っても大丈夫なのか分からない。障害学生をかわいそうだとも思う。「多くの学生が、仲間の学生の障害について好奇心を持っているが、聞くのは失礼なことだと思っている。私たちの研究によれば、各自の内では、沢山の内的対話が進行している。私たちは、さまざまな障害者について人々が持っている考えや感情と、障害のない者について人々が持っている考えや感情に関して調査を行っているが、障害のない学生は、他の障害のない学生より障害学生と共に関することに對して気詰まりを感じている。

接触に関して言うと、カナダでは、障害者との接触が、家族の中でのものであると、職場でのものであろうと、障害学生に対する障害のない学生の考えや感情にはほとんど影響はないようである。また、その人にどんな障害があるかということも、その人が盲であろうと、ろうであろうと、車椅子を使用していようと、たとえそのような人々の間に信じ難い違いがあつたとしても、接触の影響にはほとんど違いがないようである。

障害のない人々は、障害者に対して、障害のタイプに拘わらず、次のような考えを持っている。まず、一般的に、その障害者について障害のない者に対してよりもより多くの考えを持つ。それは、肯定的考えや否定的考えである。これは、カナダの社会が障害者について相反する感情を持っていることを反映している。

私の研究結果によれば、障害者と接触したことがある人々は、自分について（自己に焦点を当てた）肯定的な考え（たとえば、「私は新しい人に会えて楽しい」）をより多く持ち、自己に焦点を当てた否定的な考え（たとえば、「私は、私のことをこの人に誤解して欲しくない」）はあまり持っていないかった。彼らはまた、障害者についてもより多くの好意的な考え（たとえば、「この人は、かなり能力があるようだ」）を

持ち、否定的な考え（たとえば、「気の毒な人だ」）はあまりなかった。

障害のない学生は、しばしば障害学生について紋切り型のイメージ——非常に肯定的なものと、非常に否定的なもの両方——を持っている。彼らは、障害の背後にあるその人そのものを見ていない。その障害学生を個人的な趣味や希望を持った個人として見ない。車椅子の先を見ないのである。

障害のない学生の中には、「自分も障害者になったら、生活はどのようなだろう」ということを考えてしまうために気詰まりを感じる人がいる。また、そのほとんどが女性だが、本当に肯定的な態度を持っている学生もいる。

障害のない学生は、「かわいい小さな松葉杖をついている、かわいらしくて依存的な子ども」、あるいは「人生の終わりが近く、病院や老人ホームで暮らしている、貧乏で依存的な老人」という、メディアの歪められたイメージによって信じ込まされたもの以外に、障害のある同級生に対して何を期待すべきか分からない。障害のない学生は、障害のある同級生が他の学生と同じことをしているのを見ると、あまりにも大げさに誉めがちである。しかし障害学生は、たとえ、仲間からの肯定的な反応を歓迎していたとしても、過剰の肯定的反応はいたわりつつ見下していると感じる。

私の大学では、年一回、もともと傑出した学生に大賞が与えられる。この賞を獲得するために、学生は、優秀な成績を修めなければならない。運営委員会、学生評議員会、学科ごとの委員会のいずれかに参加して大学運営に貢献していること、学生のクラブで積極的に活動していることも必要である。表彰式に行くと、普通、賞を受けた学生は、ステージに上がり、全員の拍手を受ける。ある年、盲の私の学生の一人が賞を受けた。彼は、非常に頭が良く、素晴らしい人格の持ち主であった。彼が盲導犬と一緒にステージを歩くと、いつものように拍手が起った。しかし、人々は、立ち上がって、しばらく拍手を送り続けたのである。普通、並外れたパフォーマンス以外にそうすることはないだろう。立ち上がっての拍手は、聴衆が与え得るもつとも素晴らしい賞賛である。明らかに、聴衆は、盲なのに、この賞を得るに十分なことを成し遂げたその学生が、大賞に値すると感じていた。彼が盲ではなかったら、彼は立ち上がらなかつただろう。

私たちは、障害者に多くを期待しない。だから、彼らが障害のない者と同じレベル、あるいはそれ以上を達成すると、それは驚くべき、非常にすごいことであると思ってしまう。これは非常によく起こることなので、知的能力のある障害者は、過度な賞賛を受けてきたのである。障害のない者は、思いやりのある善意でそうしたにも拘わらず、障害者は、この反応を常にそのように解釈するとは限らない。彼らは、そのような過度の賞賛の根底に、障害があるのだから障害者にできるはずがないという前提があることを感じてしまう。

私の研究室にいるある同僚の研究は、障害のない者をより気楽にさせるために、障害者にできることが沢山あるということを示唆している。たとえば、障害者が、機転をきかせて、自ら障害を知らせることをすれば、他の人々の好奇心は正当化される。障害者は、自分の障害の肯定的な側面を強調することができる。ユーモアのセンスが役に立つ（「まったく悪いということもありませんよ。真つ暗闇でも、本当に簡単に障害物を避けて通ることができるんですから」）。障害者は、「見る」、「聞く」、「歩く」といった、障害に関係するような言葉を使っても大丈夫だと進んで申し出ることもできる。障害のない者と同じ態度や価値観を表明すること、他人に関心を示すこと、大学のクラブやグループ、授業など障害があろうとなかろうと、学生がしているすべてのことに自分が参加することについて話し合うことも有効な道である。これらのトピックスは、障害のない学生をより気楽にさせる。

障害のない学生やスタッフが、障害学生に対してより気楽に感じるようにさせる一つの方法は、前述のように、感作プログラムを行うことである。これを行うときは、参加者に、「障害があるということ、できない、無力、恐ろしいということなのだ」と感じさせないで、「そうではないのだ」と感じさせることが重要である。

6 障害学生自身による障壁

障害学生自身も隠れた障壁の一因となる。北アメリカでは、障害学生の中には、他の人々と同じでありたいがために強く要求しながら、どんな犠牲を払っても障害のない学生と同じ条件に合わせようとする者がいる。彼らは、障害がないと「思われたい」ということで、如何なる特別な調整も頼まず、障害があることを誰にも言わない。私の学生に、いつも教室の後ろに座ろうとする人がいた。彼はよく見えなかった。黒板の字を読むためには、本当は、一番前に座らなければならない。しかし、たとえそうであろうと、彼が教室の後ろに座っているので、目をノートから数センチまで近づけないと彼はノートをとれないということも誰も気づかなかつたのである。彼は、私の授業をうまくこなせなかつた。試験期間がきても、彼はまだ、問題があることを私に話してくれず、授業の資料を拡大するようにも頼まなかつた。その代わり、彼は、試験当日もそこに座り、試験問題を読もうとした。一文字ずつテストを読んでいたのも、時間内に終わらず、成績は惨憺たるものであつた。しかし、彼にとつてもっとも重要なことは、他の人と同じように見えること、要求をしないことだつたのである。

そのような学生に対して、視覚障害があることを公衆の面前で認めるように要求することは、たとえ、

個人的に私と話しているときでも、同級生の前で話しているときでも、教員としての私の義務ではないと思う。

ほとんどの障害学生にとって、何らかの調整を受けることなしに、授業を修めることは困難である。単にできないので失敗してしまう学生もいるが、自分の問題を隠し通していても、成功する学生もいる。

障害学生の中には、本当に自分が良い成績を取つたのか、教員の同情のおかげで良い成績がついたのかということについて多くを心配する人がいる。そのような学生は、自分のことを良く思わないようである。

すべてのことがその人のために整えられていたところから来た障害学生もいる。彼らが大学に入学して自分を過信している場合、実現不可能な期待を持ち、支援がないことに腹を立てたり、辛辣になつたりする。かなりの時間をかけて新しい現実に対応する人もいるが、決して適応しない人もいる。

自分の前途を自分で妨げてしまう学生のほとんどは、別のカテゴリーに入る。そのような障害学生は、一般的に、何が必要なのかを他の人々に知らせることが下手なので、自分の見えない障壁の一因になつてしまう。彼らは、自己擁護技能をあまり持っていない。

ある旨の学生の例を挙げよう。学期の初め、彼は、私のオフィスにやってきて、こう言つた。「みんな冷たいんです」

私は、彼が何を言おうとしているのか分からなかつたので、「何か特別に必要な物があるならいつて下さい」と、彼に言つた。

「はい、先生」と彼は答えた。

私は、残りの学期中、授業以外で彼に会うことはなかつた。彼は、宿題のほとんどを提出せず、試験

にも来なかった。また、彼は、録音した試験が必要であること、彼の答えを書いてくれる人か、テスト中に自分で入力できるようにコンピュータが必要であることを決して私に言わなかった。その当時、私は、盲の学生をどのように教えるかということについてあまり知らなかったし、彼も、私が理解できるように助けてはくれなかった。不幸なことである。

学生は、自分の障害を教員に説明すべきである。そして、教員が必要な調整を理解できるように助けるべきである。同じように見える障害がある学生でも、かなり異なる調整が必要であることがある。学生が言わない限り、教員には、誰がどんな援助を必要としているのか分からない。

たとえば、学生は次のように、自分のニーズについて具体的に話すべきである。「私は弱視です。先生がデモンストレーションをなさるときは、拡大して印刷された何らかの情報を下さい。ビデオがあるときは、前の方に座ってもよろしいですか？ スクリーンに資料を写すときは、内容を説明して下さい。そして、ビデオで何が進行しているか説明して下さい」、「話すときは、手で口を覆わないで下さい」、「校外見学のときは、バスに乗って行ける方法を確保して下さい」、「読唇しやすくなるので、濃い色の口紅をつけて下さい」

障害学生が、自分のニーズについてうまくコミュニケーションできない理由は沢山ある。教員や偉い人に近づくのを恥ずかしがっているのかも知れない。人の負担になりたくない、他の人々と違う扱いを受けたくないと思うので、調整を頼みながらいない学生もいる。多くの障害学生は、すべての学生がときには援助を必要とするということを理解していない。私の研究によれば、障害学生は、教員に援助を頼むことについて障害のない学生より否定的な見解を持っていた。障害学生も障害のない学生も、しばしば同じような困難な状況に陥るが、そのようなとき、障害学生は違う気持ちを持つようだ。自分の障害

のおかげで自分だけが苦しい目に遭うのだと考えてしまうのである。

私の研究、また、学生、教師、心理学者としての私自身の経験は、ある点で一致している。すべての学生は、ときに、特別な注意を必要とする。そのとき、学生は、障害があるうとなかろうと、緊張や気詰まりを感じる。しかし、学生が教員からの援助を必要とするときに、問題について話し合った後は、自分や教員について、うまくやっていく可能性について、より肯定的な気持ちになることも明らかである。

研究によれば、教員が、自分の教え方を変えて、障害学生からの要求に応えることは、恐らく、そのクラスにいるすべての学生にとって役に立つことも明らかである。講義が明快であること、OHPが読みやすいこと、講義が聞き取りやすいこと、よく準備された読むべき文献や宿題が前もって渡されることによつて、すべての学生が利益を得るのである。

学生の中には、障害があるうとなかろうと、単に、よく準備せず、課題に対して真面目ではないので、できない人がいる。北アメリカの大学では、学習意欲が欠如しているために勉強しない学生は失敗する結局、そのような学生は、障害があるうとなかろうと、落第してしまう。それはそうあるべきだ。障害学生であるうと、落第させられるべきである。

7 障害学生は他の学生と同じである

恐らく、もつとも重大な隠れた障壁は、障害学生が、他の学生とまったく同じであるということである。他の人々と同様に、障害学生も、自分の障害以外は、障害についてはほとんど知らない。彼らの多く

が、社会の価値観や態度を共有し、自分とは別の障害を持つ者から距離を置きたいと思っている。「私は彼らと同じではない!」と。

たとえば、盲の学生は、女の子と付き合う前に、視覚障害のない友人に彼女を調べてもらうのだと私に言った。友人が、彼女は本当に素敵だと言えさえすれば、彼は彼女を招待する。「他にどうやって彼女が美人かどうかを知るのでしょう?」と彼は尋ねた。彼は、男の子なら、かわいい女の子と付き合いたいと思う社会の他の人々と同じ価値観を持っている。そして、彼の場合は、自分で見分けることができなないので、友人に頼んでいたわけだ。

無感動で、乗り気でないこと、物事をしたがらないことも、問題の一因になる。障害学生および障害のない学生の考えに関する私の研究では、障害学生の方は、ほとんどそうした傾向は持っていない。日常では、ほとんどの障害学生が、障害のない学生とかなり気楽で、適切な相互交渉をしていた。問題となる状況は、援助を受けることに関係していた。障害学生は、援助を必要とする、あるいは、援助を受ける立場にいるとき、気詰まりを感じていたのである。

カナダでは、一般に、自分と違う人を助けることは、良いことであると考えられており、そうするとき、私たちは、自分は良い人だという気持ちになる。同時に、助けられる側になることは申し訳ないと考えられている。障害学生が援助を必要としているとき、特に気詰まりを感じるのはそのためである。

それ以外は、障害学生は、一般的に、障害のない者と非常に気楽にいられる。私のすべての研究において、障害のない学生と障害学生の間で、障害のない学生への態度の違いは見られなかった。

VI どのように隠れた障壁を除去すべきか

障害学生は、隠れた障壁を克服するために、多くのことをすることができる。

障害学生が、隠れた障壁についてできることには、時間がかかり過ぎないようにする必要がある。カナダで、一九八六年、高校後の教育を受けている障害学生のグループが、システムにおける必要な変化を主張するために、全国障害学生教育協会 (NEADS) を結成した。現在、カナダでは、四、〇〇〇人以上の障害学生が NEADS の会員である。カナダの障害学生は、NEADS で団結している。彼らは、会議を開いたり、講演者を招いたり、プロジェクトを計画したりしている。これは素晴らしい団体だ。NEADS の目標は、以下の通りである。

- (ア) 障害学生や大学の障害学生を支援するプログラムに関わっている専門家のためのコミュニケーションネットワークを自らつくり、広げていくこと。
- (イ) 障害学生の教育的資源や環境に影響するような事項に対して、速やかに、意味のある対応をする力量を持つこと。
- (ウ) 高校後の教育や障害学生に関する情報の収集と普及を促進すること。
- (エ) 消費者が自己擁護できるように、大学における障害学生団体の結成を奨励すること。

Ⅶ 障害のある助手や学生に助けられて

私のところで働いている人々について述べたいと思う。私は、心理学者であるから、教え、研究し、臨床での仕事もする。研究を行う過程で、私がすることは、雑誌の論文を読む、図書目録をつける、質問紙を配布する、データをコンピュータに入力する、データをまとめる、データを分析する、結果を論文にまとめるなどである。私のところには、さまざまな立場で私と一緒に働いている五人の研究助手がいる。障害のある私の助手について述べよう。

ジェイソンは、社会科学を専攻し、学士号を取得し、大学を卒業している。彼は弱視だ。平坦な所は普通に歩けるが、階段や段差があると、つまずいてしまう。彼を使いに出すときは、「マクドナルドまで五ブロック行って左へ曲がり、次の信号まで二ブロック行って右へ曲がる」などと、彼に行き方を説明しなければならぬ。それ以外にも、彼はよく働いてくれる。物を取ってきたり、物を配ったり、図書館から本を借りてきたり、データを入力したりする。仕事が速く、正確で、結果についてもよく気がつく。彼は、コンピュータが好きで、私の研究班の八台のコンピュータすべてを管理している。彼は、良い人柄で、同じ学科の他の教員も、コンピュータに問題が生じると、彼の専門的能力を頼って、見てもらっている。弱視なので、彼は、自分がしていることを見るために、コンピュータの画面にかなり近づかなければならないが、それによって、仕事をうまくこなすことが妨害されているわけではないようである。彼の障害ゆえではなく、彼の専門的能力故に、私の学科では、彼は、ひっぱりだこだ。

ことができない。活字しか読めない。彼が、彼にあてた私のメールが読めるように、私はコンピュータで打ち、印字している。私の手書きの文字はひどく、私の秘書は、私が彼らに残した指示が読めないと言っている。今や、私は、ジェイソンのために印字しているが、誰のためにでも簡単に印字できることが分かった。彼らは全員、私にこれは大きな改善だと言う。少なくとも、私の書いたものを読むことができる。

私は、既にソーシャルワーカーでもある助手の女性のことを述べた。彼女は重複障害で、難聴で、車椅子を使用しており、片腕しか使うことができない。彼女は失読症、つまり、読むことも困難である。たとえば、そのために、彼女は目の動きや注視を自分でコントロールすることが困難である。読むときに、行を左から右へ読み、次の行の左端に移るのではなく、彼女の場合、一行の中の二、三語を読み、次の行でその下の箇所に移って二、三語読み、また次の行でその下の箇所に移るといふ具合に読んでしまう。これが起こらないようにするために、彼女は、書かれた資料を読むとき、ガイドとして、特別な定規を使う。私たちはまた、彼女が片手でもキーボードとマウスを扱えるように、さまざまなコンピュータの調整をした。

彼女は、障害があるから、私のところで働いているのではない。彼女が学士号を持ったソーシャルワーカーであり、私の能力を補ってくれる能力を持っていて、研究に関係したことで、私には想像できなかったことについて知っているからである。彼女は、政府の政策に精通しており、どのように政府の文書にアクセスするか、その問題は何かなどということを知っている。

私のところには、障害のない三人の学生の助手もいる。すでに触れた二人の助手にできないことがあると、この障害のない学生がそれを引き受ける。しかし、私たちが、彼らが必要とすることは滅多にな

い。彼らがすることの例をお話する。私は、盲の学生用に教材をテープに吹き込ませなければならぬ。ジェイソンでは、テキストを見ることが困難なので、この仕事は難し過ぎる。ソーシャルワーカーは難聴なので、話し方があまりはつきりしていない。したがって、障害のない学生の助手が吹き込みをする。

次に、私の学生の何人かについても話そう。彼らには、普通の障害がある。三〇年近くの大学教員生活の中で、私が教えたもつとも優秀な学生の一人が、盲だ。彼は非常に賢く、私に多くのことを教えてくれた。彼は、思い込んでしまうのではなく、彼が必要とすることを尋ねるように教えてくれた。OH Pを使うときは、いつも、それを大きな声で音読するという習慣も教えてくれた。私はコンピュータで試験を用意する。他のすべての学生は、印刷された用紙を渡されたが、この学生は、フロッピーで試験を受け、コンピュータに質問を音読させることができた。ついでながら、私の教材を彼のコンピュータに合わせるができない場合に、そのようなことを引き受ける仕事をする人をカナダの大学は雇っている。

かつて、私がビデオを見させているとき、そのテープに出てくる資料のほとんどが、視覚的なものだけであることに気が付いた。対話の部分がないので、見えないならば、何が起きているのか分からなかったのである。私は、この学生に何をすべきか尋ねた。彼は、解説がないときは、隣に座り、ビデオで何をやっているのかを簡単に、静かに教えてくれるように頼んだ。

もう一人の私の学生だったデボラは、私が、彼女のために何をすべきか分からなかったため、難問であつた。彼女は、車椅子のように動かせるベッドに横になり、授業の途中にやってきた。彼女は、後ろへは鏡を見ながら、それを運転した。私は彼女に、私にできることを尋ねた。彼女は、目と口しか動か

すことができなかったが、コントローラーに息を吹き込むことで多くのものをコントロールしていた。彼女は、気管切開をしていた。また、彼女は、手で車椅子を操縦するくらい指のコントロールはあつた。彼女は、黒板が見えるように、教室の前の方に座りたいと言つた。私は、彼女が前にいられるように十分なスペースを確保し、彼女が配布資料を受け取っているかということを忘れずに確かめる努力をした。私たちには問題がなくなった。

ドーンソン大学は、カナダの南部でも非常に北に位置しているので、寒く、雪や氷の季節が長く続く。必要とする障害学生のために、特別な交通手段があり、実際、すべての障害学生が利用できる。しかし、雪がひどいときは、デボラは、大学に行くことができず、授業を欠席した。私の配布資料やシラバスは、フロッピーに入っていたので、Eメールやファックスで彼女に送ることができた。彼女は、ファックスで、私に宿題を提出することもできた。彼女が次に大学へきたときには、授業を半分欠席した他の学生とまったく同じように、見逃した視聴覚教材を図書館で見ることができた。

デボラは、優れた学生で、私の授業に一生懸命取り組み、非常によくやっていた。成績も優秀であつた。彼女は、大変な障害があるように見えたので、他の障害学生よりできないように思われたが、彼女の知性に問題はなかったのである。

私の大学には、三〇人以上の障害学生がいる。だから、今までに、非常にさまざまな障害学生を教えてきた。私の経験では、障害学生を受け持つことは、私により良い教師になるように教えてくれる。

そのことを説明するために、ある例を話そう。読唇ができず手話でしかコミュニケーションできないろうの学生を初めて受け持ったとき、どうすべきか迷つた。私は彼に尋ねた。手話通訳者が、私の質問を彼に通訳し、彼が手で何と言ったか私に話してくれた。

その学生は、私に説明した。「質問があるときは、私が手話通訳者に伝え、クラスで他の学生が質問するのと同じように、手話通訳者が私の質問を話してくれます。先生が私に話しかけたいときは、手話通訳者が先生のおっしゃることすべてを手話で通訳してくれます。もちろん、配布資料や宿題には問題はありません。読んだり書いたりすることには問題ありません」

最初、他の学生も私も、教室の一角に立って、手を動かしている手話通訳者のことが非常に気になったが、その学期が終わるまでには、手話を必要とするその学生が手話通訳者に注意を払うだけで、他の者には気にならなくなった。

難聴の学生に対して、講義中の私の唯一の特別な配慮は、話しているときに、学生の正面を向く、口を覆わず、はっきり喋るということである。もちろん、これによって、他の学生も同様に助かる。研究によれば、すべての人は、相手の口が見えると、話していることをより理解することが示されている。

盲の学生のためには、教材をテープに吹き込んだり、そのようなテープを探したりするのに時間がかかるので、私は、前もって配布資料を確実に準備しなければならぬ。そのために、私は、さらに前から講義や教材を計画しなければならぬ。結果として、教材はよく準備されることになる。教材が既に準備されていれば、欠席している間もそれで勉強できるから、前もって準備することによって、何らかの理由で授業を欠席した他の学生も助かる。自分の時間をしっかり学業に充てたい学生は、前もって学期の宿題を受け取り、私のスケジュールではなく、自分のスケジュールで準備することができることになる。私の学生は全員、教材や授業が前もって準備されることを歓迎している。

概して、教員として私が障害学生にしてきた調整は、すべての学生を援助し、私の教え方も改善してきたことを知った。

Ⅷ コンピュータと情報技術の役割

コンピュータへの依存が増し、仕事の専門化が進んだことによって、障害者に適さないと考えられる職業が増えることになるという。しかし、これは正しくない。技術の変化は、これらの仕事を障害者にアクセス可能なものにするように信じ難い影響を与えてきた。しかし、これらの職業の多くが、高校後の教育で普通得られる知識や技能を必要としているのである。

ドーンソン大学では、障害学生の割合が着実に増加している。これらの学生が、成功した教育的経験を持つていなかっただら、この増加は起こらなかつただろう。もし、大学が困難を抱えていたならば、もし、教員としての私たちが困難を抱えていたならば、もし、障害学生が特に費用がかかり、あるいは、負担になっていたならば、このような変化は起こり得なかつただろう。

これと同様の変化は、事実上、北アメリカのすべての大学で起こっている。障害学生の割合が増加した理由には、以下のことが含まれる。

(ア) 医療技術の進歩によって、出生時の問題や外傷を起す事故を切り抜けて生き残る人数が増加した。

(イ) さまざまな技術の改善によって、障害者が自立した、生産的な生活を送れるようになった。特に、コンピュータやネットワーク技術が鍵となる役割を果たしている。

(ウ) 連邦や省から与えられる学業支援が創設されたことよって、障害学生は、高校卒業を援助され、その後の教育を考えるように奨励されている。カナダにもアメリカにも、今や、すべての学生が優

れた高校教育にアクセスできるということを保証する法律がある。

(エ) 最近、アメリカで、障害者に関する連邦法が通過したことが周知されたことよって、障害者の権利に対する人々の意識が高まり、障害学生が、教育や就労における平等なアクセスへの権利を持つているという意識も高まっている。アメリカの連邦法は、障害学生が障害のない学生と平等な教育的機会を持つことを保証するために、必要なときに、学業的な調整を行うべきであると定めている。その法律にも拘わらず、過去、そしてこの法律があるのに現在でも一般的な傾向におけるおもな例外は、理学、工学、数学の分野で、障害のある大学生の数が少な過ぎることである。

研究によれば、障害学生と相互交渉している教員、スタッフ、学生は、一般的に、これらの学生と活動することについてより肯定的な態度を持つようになる。私が最近終えた研究で、私たちは、三七名のさまざまな障害のある学生、九四名の障害学生を教えたことがある教員、一七名のそのような経験のない教員にインタビューを行った。私たちは、教員に障害学生(車椅子を使用している、移動障害があるが車椅子は使用していない、筋肉損傷、視覚損傷、脳性マヒ、聴覚損傷など)を教えることにどの程度関心があるかということを一〇点尺度(一〇=まったく関心がない、一〇〇=非常に関心がある)で示すように頼んだ。

障害学生を教えたことがある教員は全員、そのような経験がない教員より進んで障害学生を教えようとしていた。障害学生と接触を持つことよって、教員は、否定的ではなく、より肯定的になったのである。調整の方略をよく知っている教員も、障害学生がプログラムに参加することに対して平等な機会を持てるように保証する手配をする心構えが良くできていた。これらの結果が、カナダ以外の国で違はずがない。

ワシントン大学の「Do It」と呼ばれる組織が制作したビデオがある。このグループは、非常に創造的なウェブサイトを持っており、特に、数学、理学、工学部にいる障害学生の機会を促進することに関心を持っている。ビデオは、障害学生の成功において、教員と学生の関係の重要性を強調している。そこには、一緒にうまく活動している教員と学生の姿が映し出されている。教員は、障害学生と活動するための方略について話し、成功した障害学生は、成功の一因となった技術や調整に関する自分の経験について話している。

ビデオに登場する人々は、学業上の経験における幾つかの問題やその解決方法を述べている。私たちの大学でも、これらと同じ問題やその他の問題に直面してきた。調整の方略は、単純なこともある。創造性と柔軟性を必要とすることもある。私たちが、プログラムや授業をすべての学生にとってアクセス可能にする方法について考えるのに時間をかけるならば、現在や将来の学業上の難問を克服する心構えが良くできるだろう。

このビデオを制作した組織「Do It」への連絡先は以下の通り。

"Do It", University of Washington, Box 354842, Seattle, WA 98195 USA

電話番号(音声、TTY) — +1-206-985-DOIT

Eメール — <doi@u.washington.edu>

Ⅹ 法的な権利と責任

一九七三年リハビリテーション法セクション五〇四と一九九〇年障害を持つアメリカ人法（八〇、一
二〇頁参照）は、以下のように述べている。

資格のある障害者は、単に障害があるという理由だけで、如何なるプログラムや公的機関が行う活動の
もとでも参加から排除されたり、それらから得られる利益を拒否されたり、差別されたりすべきではな
い。

障害を持つアメリカ人法にはまた、強制条項も含まれる。連邦プログラム、連邦からの資金援助を受
けている大学、連邦から給料をもらって働いている人々、これらすべては、障害を持つアメリカ人法
の要請に従っていない場合、連邦からの支給を止められる。私は、法律は、障害者に対する人々の態度を
変化させる良い方法であると述べた。アメリカでは、この法律は、そのもつとも注目すべき、効果的技
法の一つとなっている。

一九七三年リハビリテーション法セクション五〇四と障害を持つアメリカ人法を簡単に要約すると、
如何なる人も差別されないということである。私たちは、単にその人に障害があるというだけで、障害
者は課程や授業にうまく参加できないかと思ひ込んではいならない。その代わり、障害学生が、特定の必要
条件を満たすことができないかも知れないという懸念があるならば、私たちは、その学生が課程や授業
に不可欠な課題を達成できるように何をすべきかということとその学生や学業的調整の提供に関して

経験豊かな人に尋ねるべきである。

法律は、「資格のある」というフレーズを含んでいる。高校後の教育では、「資格のある」とは何を意
味するのだろうか？ 「資格のある」とは、以下のことがあれば（なくてもよい場合もあるが）、入学や
教育課程および活動への参加に不可欠な学業的、技能的基準を満たす人を意味している。

- (ア) 規則、政策、実施に対する適切な調整
- (イ) 建物、コミュニケーション、交通手段における障壁の除去
- (ウ) 補完的補助やサービスの提供

つまり、障害者は、適切な調整が行われれば、授業や宿題に不可欠な課題をこなすことができる場合、
「資格がある」のである。

大学生にとって、「障害者」は何を意味するのだろうか？ アメリカの法律でカバーされる障害には、
脊髄損傷、四肢の喪失、多発性硬化症、筋萎縮症、脳性マヒ、聴覚損傷、視覚損傷、言語障害、特定の
学習障害、脳損傷、精神障害、糖尿病、癌、エイズが含まれるが、それに限定されるわけではない。

これらの例は、人々が特定の課題をこなす能力を制限するような状態である。一見して分かるものも
あれば、目立たないものもある。さらに、障害の名前が同じでも、学生によって、非常に異なる能力を
持っていることがある。たとえば、脳性マヒの学生でも、歩くことが困難な人もいれば、手や声を使う
ことができない人もいる。私は、脳性マヒの学生を二、三人受け持ったことがあるが、そのうちの一人
が、ちょうど最近ドーソン大学を卒業したばかりである。私たちは、彼女の将来について話し合い、彼
女は、私にマギール大学（モントリオールにある一流大学）でロシア語をさらに研究する計画をしている
と言った。もう一人の脳性マヒのある私の学生は、電動車椅子を使用していた。私は、彼女の話を理解

するのに長い時間かかった。

X 調整の方略

私は、さまざまなタイプの障害について検討し、高校後の教育において、障害学生が、障害のない学生と同等に参加できるようにしてくれる調整の例を話そうと思う。これらのすべての例は、「Do It」の人々が用意した資料から引用したものである。

1 視覚損傷のある学生のための調整

「弱視」といっても、沢山のさまざまな障害を意味する。弱視の学生によっては、普通に書かれた資料では、文字が小さ過ぎて読むことができなかったり、実験室で扱うような物がぼやけて見えたりする。視野狭窄の学生は、非常に限られた視野の範囲内ならば、物がはっきり見える。視野の一部が見えないという人もいる。これらの学生は、視覚的に提示された教材を学習するのに視覚損傷のない学生より時間がかかり、疲れやすい。

弱視か盲のいずれかの視覚損傷がある学生のためにできる調整の例を話そう。弱視の学生のための調整には、拡大文字の本、拡大文字の、あるいは、字の盛り上がった表示、配布資料の字を大きくすることがある。そのような教材を調達したり、録音テープを入手したりするには、何週間も何か月もかかるので、教員が、教材が必要になる前にそれらを選び、準備しておくことが不可欠である。視力の弱い学生のためのその他の調整の例としては、教室の照明が特に明るい所に席を設ける、画面を拡大できるようにテレビ画面に接続する拡大器を用意する、授業の宿題でコンピュータを利用できるようにする、画面を拡大する装置を備えたコンピュータを用意するということがある。重要な事柄が、基本的に、視覚的に提示されるような講義やデモンストレーションでは、その事柄をはっきりと簡潔に話すことが助けになる。

先天盲の学生は、視覚的メタファー（この図は木のように見える）といった、視覚的な事物の言語的記述や抽象概念を理解することが困難かも知れない。しかし、後天盲の学生は、そのような表現を理解することができるだろう。さらに、盲の学生にとって、色の違いを使ったデモンストレーションは、形、温度、手触りを強調したデモンストレーションに比べて、理解することがより困難である。コンピュータディスク上で印刷された教材（したがって、ディスクにそれが入っている）にアクセスできることによつて、適切な技能を持った盲の学生は、テキストを音声で読んだり、点字を打ち出したりするコンピュータを使うことができる。

北アメリカでは、お店で買うすべてのコンピュータに画面上のことを音声（かなり機械的な音声）で読んでくれる装置が備わっている。音声は、聞く人の技能に合わせて、速くしたり遅くしたりすることができる。これは、視覚損傷のある人々にとつて、情報を得る良い方法である。この技術は、すべての人が利用でき、役に立つ。たとえば、私は、部屋に行き、コンピュータが雑誌論文を読んでいる間に、植物に水をやることができるのである。

盲の学生のためのその他の調整には、触知できるモデル、触知できるように線が盛り上がっている絵、

喋る温度計や喋る計算機のような改造された実験器具、工学的文字読みとりコンピュータ、音声出力付きのコンピュータ、点字プリンター付きのコンピュータがある。

2 聴覚損傷のある学生のための調整

聴覚損傷のある学生の中には、ある範囲の周波数や音量内の音しか聞こえない者もいれば、まったく何も聞こえない者もいる。一般的に、先天ろうの学生は、後天ろうの学生より口頭の言語を話したり、理解したりすることが困難である。聴覚損傷のある学生は、大きなホールで行われる講義、特に、響いたり、話す人が小声で、早口で、不明瞭に喋ったりすると、理解することが困難になる。しかし、これらの問題は、そのような講義を聞いていないすべての学生に共通するものである。

聴覚損傷のある学生は、デモンストレーションを見ることと話されていることを理解することを同時に行うことが困難である。特に、彼らが、手話通訳者、字幕、話し手の唇を見ている場合、そうなる。クラス討議も、特に、討議の進め方が速かったり、数人が同時に話したりすると、理解することが困難である。

聴覚損傷のある学生のための調整には、手話通訳者、音声増幅システム、講義するときに学生に正面を向けること、講義の概要の文書、授業の宿題、実験の教示、デモンストレーションをまとめること、他の学生がした質問や意見を教員が繰り返すこと、会議や討議にEメールを使うことがある。これらの調整のほとんどは、もちろん、障害のない学生にとっても役に立つ。

3 特定の学習障害のある学生のための調整

これらの学生は、ある種の情報を処理することが困難である。のろい、意欲がない、やる気がないのではない。一般的に、学習障害のある学生は、平均、あるいは、それ以上の知能を持っているが、自分の知識や理解を示すことが困難である。学習障害のある学生にとって、聴覚的情報、視覚的情報、触覚的情報は、ごちゃ混ぜになることがあるので、書かれた情報を処理するのに長い時間がかかることがある。

カナダでは、もつとも一般的な学習障害は失読症で、読みの困難である。頭の中でひと続きの単語を文字単位に置き換えてしまうので、印刷された資料を見ると、意味が分からなくなってしまう。また、単語を書くときは、文字の順番を混同してしまうので、他の人々が彼らの書いたことを理解することが困難になる。しかし、彼らは、自分が言いたいことや書きたいことを正確に分かっており、しばしば口頭では、明確に説明することができる。これらの学生は、書かれた情報を処理したり、書いたりするのに長く時間がかかるので、特に、障害のない学生と同じ時間しか与えられていない場合、長く読んだり書いたりしなければならぬ宿題や試験は困難である。

学習障害のある学生の中には、障害が聴覚弁別に影響しているために、口頭で与えられた教示を処理することが困難な人がある。そのような学生は、書くことには何の問題もないが、聞いたことを理解することに問題がある。また、静かな場所で、一対一でなら、自分の考えをまとめ、伝えることができるのに、騒々しい部屋ではそれができなくなるという人もいる。

学習障害のある学生のための調整には、ノートテイカー（障害学生のために講義のノートをとってくれ

る人)、授業を録音すること、試験時間の延長、より静かな試験場を用意すること、その他の試験に関する手配を行うこと、学生に講義や授業の概要を提供すること、音声出力付きのコンピュータ、スベルチェッカー付きのコンピュータ、文法チェッカー付きのコンピュータを用意することなどの方略がある。

4 運動損傷のある学生のための調整

運動損傷には、松葉杖、歩行器、車椅子の使用を必要とするような下肢の損傷、手を使えないといった上肢の損傷が含まれる。そのような学生は、ある教室から別の教室に移動するのに時間がかかる。授業によっては、必要条件として実地研究が含まれるものがあるが、運動損傷のある学生の中には、現場まで行くことが困難な人がいる。また、物を扱う、ページをめくる、キーボードを叩く、ペンで書く、研究資料を検索するために図書館へ行くということが困難な人もいる。

運動損傷のある学生のための調整には、ノートテイカー、筆記者(話されるすべてのこと、たとえば、運動損傷の学生がいった試験の答えを書き留める人)、デモンストレーションに必要な実際の動きを、運動損傷のある学生の指示に従って行う実験アシスタントの確保、車椅子が下に入るように調整できる机、アクセス可能な教室の準備、試験時間の延長、試験に関するその他の手配(試験をコンピュータディスプレイに入れる、答えをテープに録音する)、簡単にアクセスできる場所に備品を移動させること、コンピュータで利用できる授業の教材、モールス信号入力や音声入力のような特別な装置を備えたコンピュータ、キーボードの代わりとなるもの、インターネットへのアクセスなどの方略がある。

5 健康上の問題がある学生のための調整

健康や薬物治療の状態が、記憶や活力に影響することがある。さらに、健康上の問題を抱えている学生の中には、授業をすべてこなしたり、毎日授業に出席したりすることが困難な者がいる。

健康上の問題を抱えている学生のための調整には、ノートテイカーの確保、授業を録音すること、出席の必要条件を柔軟にすること、試験時間の延長、試験に関するその他の手配、コンピュータが利用できる宿題、学生と教員の討論にEメールを使うこと、学生が授業の勉強を家でできるように授業の教材、講義ノート、宿題をEメールかファックスで送ることがある。

6 授業をアクセス可能にするための一般的ないくつかの示唆

(ア) 授業の配布資料の中で、障害学生を含む、特別な配慮を必要とする学生に自分のニーズや調整について講師と話し合うように勧める。この際、障害学生だけではなく、子育ての問題を抱えている若い母親や授業に参加するために調整を必要とするその他の学生も含まれる。

(イ) 適切な形で、しかも、時宜を得た方法で簡単に調達できるように教材を選ぶ。

(ウ) 過去に行われていた調整についてその学生に尋ねる。

(エ) コンピュータで利用できる教材を使用する。

(オ) 試験の実施や授業の理解を調べる別の方法を探す。

エレクトロニクス技術や情報技術は、障害学生にとって素晴らしいものである。しかし、コンピュー

タ技術の中には、アクセスを制限するような特性を持っていることがあるので、障害学生の能力を損なうものがある。たとえば、教育用のCD-ROMに入っている教材は、拡大して印刷したり、画面を暗くしたりすることができない。私たちが教室で使う多くのビデオには字幕が付いていない。CD-ROMもそうである。

音声出力付きのコンピュータに慣れている盲人は、テキストによる表示がなく、グラフィックや視覚的な資料が沢山使われているインターネットのウェブサイトにアクセスすることが困難である。盲人には、テキストベースのウェブブラウザも必要である。

学生のニーズや調整の利用可能性における改善に敏感になったにも拘わらず、障害者は、従来の大学で、他のタイプの困難を経験し続けている。学生が、長期間病院に入院しなければならぬ場合、講義を欠席している、講義のノートを持っていない、グループ活動やクラス討議に参加していない、配布資料をもらっていない、宿題や試験を提出していないという理由で、単位を落としてしまうことがある。疲労や病気の悪化のような他の要因によっても、障害学生は、受講を続けることが困難になる。

私が暮らしているモントリオールの現実的な困難の一つは、交通手段である。交通手段の手配は、前もってなされなければならないが、しばしば特別なバンは予定した時刻に間に合わないことが多い。また、この都市はかなり北に位置しており、長い冬の間は、雪や氷に覆われるため、大学内を移動することが難しくなる。そのような手に負えない環境的障壁によって、学生は、授業を取る数が少なく、あるいは、まったく取れず、履修が遅れたり、卒業できなくなったりする。

視覚損傷のある学生の中には、障害のない者と見分けがつかない人がいる。実際、法的に盲である多くの学生は、画面を拡大して表示する以外は普通のものと同変らないコンピュータを使用している。し

かし、彼らが、普通のコンピュータソフトにできる以上の拡大を必要とする場合には、画面拡大プログラムを使用することができる。そのようなプログラムは沢山ある。これは、他のソフトと同時に使用することができる。メニューや文字を拡大することに効果がある。

この種のソフトはまた、教員の私にとって、視覚損傷の学生がいなくても、大勢の学生とコンピュータを使って仕事をするときにも便利である。私は、周りに集まっている学生に見やすいように画面を拡大するために、拡大プログラムを使うことができる。

多くの弱視の人々は、スクリーンリーダー、つまり、画面上のことを音声で読むソフトを使用している。もちろん、障害に拘わらず、普通の印刷で、宿題を紙に印刷することができるが、さらに、視覚損傷のある学生は、点字や文字を印刷する代わりに、盛り上がった線を使う盲人用の印刷システムを使用することもできる。点字で教材を印刷するプリンターや点字のディスプレイも利用できる。

ほとんどの人々は、二つ以上の出力形式を使用しているのに、入力には、普通、標準的なキーボードを通して行う。しかし、点字を使用している人々は、普通、視覚的なフィードバックが必要なマウスやその他のポインティング装置を使うことができない。そのため、ウィンドウズ95やマッキントッシュのようなシステムは、マウスからの入力が必要とするので、盲人にとって非常に困難である。

視覚障害のある学生は、一般的に、テキストベースのソフトを使用している。彼らが使用するプログラムは、グラフィックやその他の画像を処理するようには作られていない。かつて、盲の学生は、技術活用の最前線だった。しかし、四、五年前から、新しいソフトの進歩についていけなくなり、彼らは遅れ始めている。不幸なことである。

にも拘わらず、障害のあるコンピュータ利用者のニーズに応える技術的な進歩には、目を見張るもの

があり、これらの人々にとって、変化は素晴らしいものである。

難聴、あるいは、聴覚言語損傷のある学生にとっても、コンピュータ技術は、非常に価値がある。

「See-Note」システムなどのコンピュータ処理でノートをとるシステムがある。これらのシステムによって、聴覚損傷のある学生は、自分のラップトップパソコンで、講義中に話されていることを読むことができる。このシステムはまた、講義の音声の電子翻文もするので、学生は、後で自分自身の講義ノートを持つことができる。

腕や手をコントロールすることが困難な学生もまた、コンピュータによって多くの利益を得ている。彼らは、口にくわえた棒で入力し、非常に早く「タイプ」することができる。「sticky keys」と呼ばれるプログラムは、ほとんどのコンピュータに標準装備することができるが、それによって、一度に一つのキーだけではなく、電子的に同時に二つのキーを押すこともできるようになる。これは、たとえば、「コントロールキー」とその他のキーを同時に押さなければならぬといった、複数のキーによる入力コマンドにとって非常に重要である。また、他のプログラムによって、リピートキーが繰り返し返されることを防ぐこともできる。あるキーを一定時間以上押しても、その情報は一回しか入力されない。

新しい口述筆記ソフトによって、コンピュータに普通の速さで喋った言葉をテキストとして入力させることもできる。

テキストが、息を吹いたり吸ったりして入力する装置（たとえば、一回吸うと一個のドット、一回吐くと一個のダッシュ）で、モールス信号で入力される。ソフトは、一連のドットとダッシュをコンピュータが認識でき、文字として表示できるものに変換するものもある。

私たちがほんの少しが大学の図書館にアクセスするために、自分のコンピュータが使えることを喜ん

でいる。私は、障害学生のためのサービスやプログラムに関するここ二か月の論文を調べるために、インターネットを利用した。最新情報がないかと医学、心理学、教育学の雑誌を検索した。情報に対するこの種のアクセスは、私にとって便利であり、非常に役に立つ。しかし、視覚損傷や神経筋障害のある人々にとって、自宅にいながら図書館にアクセスでき、コンピュータに図書館の資料を音声で読ませることができるといことは、信じ難い変化であり、彼らの成功を促進するものである。

学生に医学上の問題があり、入院しなければならぬ場合、単純な技術で、彼らが授業に参加し続けることを援助することができる。たとえば、スピーカー付きの電話を教室と病院にいるその学生の傍に取り付けることができる。学生は、電話を通じて、講義や他の学生のコメントを聞いたり、質問したり、教室の討議に参加したりすることができる。

XI 万人に通じるアクセス、あるいはバリアフリー設計

バリアフリーアクセスの基本的原理は、初めから、すべての人にとってアクセス可能であるように（万人に通じるアクセス可能性）すべてをデザインするということである。異なる能力を持っている人々のニーズは、計画段階から、デザインに組み込まれるべきである。

一般的に、いったん、何かがデザインされ、作られると、アクセス可能であるように改築したり、改造したりするには大変な費用がかかる。しかし、最初に、アクセス可能であるようにデザインすれば、それ以上の費用はほとんどかからない。新しい建物が設計されるときには、車椅子でのアクセスと

ということが計画に組み込まれるべきである。車椅子用のスロープは、車椅子を使用している学生や教員にとってのみ役に立つわけではない。重い教材や視聴覚機器を台車で運ぶ人、乳母車を押す人、階段を昇るのがつらい人も利用することができる。障害者にとって良い設計は、私たち全員にとっても良いのである。新しい講堂には、FMコミュニケーションと赤外線コミュニケーションのための配線工事を施すべきである。これらの技術によって、聴覚損傷のある学生は、講義を聴くことができる。建物が造られるときは、そのような技術を組み込むことにほとんど費用はかからない。いったん、建物が完成すると、そのような性能を加えることは、信じられないくらい高くつき、効率的ではない。

障害のない者に、どんなに彼らに善意があっても、計画を任せきりにすべきではない。これは、善意ある人々が大学の委員である場合でも当てはまる。障害のない者は、どんなに名声があっても、障害者にどんなニーズがあるか、障害学生にとってもっとも役に立つ調整は何かということを知らないからである。自分が設計している特定の物を使うことになる複数の障害者に尋ねなければならぬ。

私は、先に、障害学生を教えたことがある教員と教えたことがない教員の態度を比較した研究について述べた。その研究において、私は、障害学生に対する調整を行うために、大学にとって役に立つと考えられる改造は何かということを経験し、何人かの障害学生に尋ねた。物理的な調整の点で、障害学生と彼らを教えたことがある教員は、考え方がかなり一致していた。しかし、障害学生を教えたことがない教員は、沢山の示唆を提案したにも拘わらず、それらは、他の二つのグループが重要であると考えているものではなかった。

障害者や障害学生を教えたことがある教員は、スロープについてあまり懸念しておらず、大学の建物のインテリアについてもっとも懸念していた。彼らは、学生が机で勉強できるように、車椅子が入るよ

うに高さを調節できる机や学生が見ることのできる黒板を欲しがっていた。

ケベックにある、就職を支援している政府機関のパンフレットには、こう書かれている。

「大切なのは障害ではなく、能力なのです」

能力不足や障害に焦点を当ててではなく、人々の中に能力を捜すべきである。将来の従業員であろうと将来の学生であろうと、彼らを見るとき、彼らができないことを捜さないで欲しい。できることを捜して欲しいのである。

■ 質疑応答 Questions & Answers

Q 何故、一〇歳代の人に急に差別の意識が生まれてくるのか？ 極端な変化はどこから生まれてくるのか？

A 非常に良い質問だ。私が答えるかと思っていたことである。カナダでは、子どもがかなり幼いときは、どちらの性別の子どもとも遊ぶ傾向がある。八〜一〇歳頃になると、自発的に、自然に、子どもは同性でグループを作る。何故、このようなことが起こるのかは分かっていない。この「同性と遊ぶ期間」は、異性とのデートに対する関心が発達してくると終わる。また、幼い子どもは、他者からかわれることによって異性に対する関心を発達させる。この期間に、他の人々とまったく同じでありたいという欲求も発達させる。それまでに、個性は完全にできていないにも拘わらず、たとえば、他の人々と同じ服を着たがったりする。この傾向についても何故起こるのか、また、すべての人がそうなのかは分からない。

Q——私は、障害者の自立を援助する仕事を二〇年以上やっているが、障害者が自立するまでの生い立ちに関する聞き取り調査をしたことがある。日本の場合、小学校に入学するとき、障害児は、普通学校に入れないことがほとんどである。学校に入るまでは、障害児も仲間に入れて一緒に遊んでいた。たとえば、車椅子を使用している子どもも一緒に遊べるような遊びをしていた。しかし、学校に入ると障害児とそうでない子どもは分けられてしまう。すると、障害のない者は、障害者を低く見る意識、障害者は、低く見られているという意識を持つようになる。このようなことが、私が聞いた彼らの生い立ちの話の中で、かなり共通していた。

*

A——非常に興味深いことである。それぞれの社会で価値観が違うので、子どもの先生は、日本とカナダでは、かなり違った訓練を受けるのではないかと思う。北アメリカでは、多様性の受容が教えられ、多様性は価値のあることなので、そこで子どもに与えられている教育の種類は、日本の社会で与えられているものとは違うかも知れない。

*

Q——生まれたときから障害のある人と事故などによって途中で障害者になった人では、まったく同じということはないと思うが、どのようなところに大きな差があるのか？ また、感作 (sensitization) (一九六頁参照) は、よく行われているということであったが、どのようなときに、どのような人を対象に

して行われているのか？

A——しばしば後天的な障害者と先天的な障害者との間には違いがある。正式の学校を卒業した後には障害を負う場合、彼らは、既に障害者はどのようなものかについての社会の価値観を吸収している。だから、突然、自分が、「私たち」の一人ではなく、「彼ら」の一人になったとき、それは、まったくのショックである。しかし、プラスの面は、既に学校を卒業し、社会の価値観や文化を学んでいるということである。一方、生まれたときから、あるいは、幼いときから障害があり、社会の価値観が、そのような人々から隔離されて育てられるということなので、他の人々が何に価値を置くか、障害のない者とのように関わるかについて学ぶ機会がほとんどなかった場合は、態度や価値観の点で、このグループは前者と違う。

しかし、私たちが障害者をどのように教育するかという点では、彼らが、人生において、いつ障害を負ったかということは問題ではない。私の学生に、管理できない糖尿病によって三年前に盲になった人や六か月前に白内障になった人がいたら、視力が低下するので、教育者としての私の仕事は、同じようにこれらの二人の人々に提供する教材が、彼らにとってアクセス可能であるということを保証することである。

私が教えている大学には、七、〇〇〇人の学生がいる。感作の日は、私の大学の障害学生は何人が集まり、大学内に障害学生がいるということ、自分たちは多くの点で、障害のない学生と同じところもあれば違うところもあるということを他の学生や教員にもっと認識して欲しいと決意して、行われるようになった。彼らは、私たちの多くが持っている問題、たとえば、盲人と話すとき、「私の言っている

ことが分かり (see) ますか？」のような一般的な表現の中で、「見る (see)」といった言葉を使って良いかどうかという疑問を取り除こうとしている。

感作の日には、障害学生が、他の学生に「私の言っていることが分かり (see) ますか？」の中で、「見る (see)」のような言葉を使っても大丈夫で、それは単なる言葉つきであって、気にしないということの説明する。車椅子を使用している学生は、「歩く」に関する慣用句に慣れており、気にしない。障害のない学生は、これらの言葉にそんなに敏感になる必要はない。

私たちは、どのようにろうの学生と話すべきだろうか。感作の日には、彼らが、その学生の正面に向かい、口を覆わないということを説明する。「私の言っていることが分かりますか？」と聞いても大丈夫である。理解していないようだったら、あなたが伝えたいことを書いて欲しい。

このような説明のすべてが、感作の日に含まれる。しかし、このとき、車椅子の学生が階段をうまく昇降できないことを示すために、彼らを押すといった思慮のないことも起こっている。

*

Q—政府は、最初に、どのレベルにメインストリーミングを導入したのか？

A—小学校である。私が障害学生を知ったのは、普通の小学校に通っていた児童が、成長して大学に入学したときだった。一五年前、私が、専門的なカウンセラーとして会った障害学生は「スーパースター」で、断固としており、優秀で、精神的な人だった。彼らは、如何なる点でも支援のないシステムの中で、何とか成功しようとしていた。点字の知識がなかった盲の学生は、誰も読むことを助けてくれな

かったが、とても助けとなる家族がおり、彼も優秀な成績で、成功するために励んでいた。今では、障害学生は、他のすべての学生と同じである。もちろん、優秀な人もいるが、他の学生のほとんどが平均的であるように、多くは平均的である。

*

Q—大変素晴らしい御報告を受けて、とても感激している。カナダの場合、障害学生が学業を全うできるように支援することが、法律として決められており、それに基づいて、大学側もさまざまな努力をしている状況が分かる。そのような努力に対し、国、あるいは、省は、予算的な措置をしてくれるのか？ 特に、私立大学の場合は、どのような措置がなされるのか？ また、この授業を通じて、あるいは、先生の講義の中で、障害者が教育の場で支援を受けながら、自分の本来持っている能力を伸ばし、自立していつているという事実を目の当たりにして、大変感激している。そのようなことに携わっておられるフィチテン博士、あるいは、同僚の先生方の情熱や熱意はどこから生まれてくるのか？ 壁にぶつかることもあると思うが、どのように乗り越えられているのか？

A—資金についてであるが、カナダでは、すべての大学が「半公立」、すなわち、一部私立で一部公立なので、資金は常に問題になる。障害学生の団体である NEADS (二二二頁参照) は、カナダ中の資金源のリストをつくっている。ケベックでは、大学は、各障害学生(障害があると立証されている)のために、省政府から資金援助を受けている。障害学生は、政府からある種の装置を受ける資格が与えられ、資金援助を受けているので、しばしば自分の装置を持っている。これらの特定の装置には、学生の

障害によるが、たとえば、コンピュータや拡大システムがある。

個人的な付き添い人が必要な学生は、彼らを援助する付き添い人を雇うことができるように政府の手当を受けている。政府は、障害学生に大学教育を修了するように奨励している。それは、そうすれば、彼らがいつそう生産的になり、政府の福祉手当などに頼る必要が減るからである。ドーソン大学では、付き添い人が必要な障害学生が、協力し合うことを決定した。彼らは、お金をため、常に利用できるように数人の付き添い人を雇った。

法人スポンサーからの寄附による、障害学生のための奨学金もある。

それから、このトピックに対する私の熱意についてであるが、それは、庇護授産所に行く運命にあった優秀で、能力のある人々が、施設を退所し、高校後の教育を受けるといふ、人生における信じ難い変化を見たことからである。私の大学やカナダが、学生の障害だけではなく、能力を見始めたということは、素晴らしいことである。

*

Q——協力的ではない教員が多く、うまくいかない大学もあるのか？ カナダの大学すべてが同様にうまくいっているのか？ うまくいっていない大学は、こうするとうまくいく、この点がうまくいっていないということがあるのか？

A——もちろん、協力的でない教員もいるし、私も授業について問題を抱えている。しかし、多くのことが助けになる。私のところには、教員の協力に対する監視を含め、障害学生が大学の課程に統合され

るように支援することに関わる仕事をしている人々がいる。こうした人々は協力を促進するために、法的要請が如何なるものかについて教員に直接話すことができる。たとえば、講義を録音することに反対している教員に対して、障害学生を教員に会わせ、この学生のみがテープを使用すること、授業終了後は速やかにテープを消すことに同意してもらうようにすることができる。もう一つの解決方法は、他の教員の中に、障害学生に対して良い感情を抱いており、「問題教員」も知っている人を探すことである。その人は、非協力的な教員を安心させたり、実行可能な調整を指摘したりすることができる。

教員の中には、単に、障害学生を受け持ったことがないので、そのような学生が成功できるといふことを信じていない人がいる。そのような人々は、コーディネートサービスの責任者と話すことによって、しばしば安心する。

最後の手段は、サービスコーディネーターが、障害学生を非協力的な教員から引き離すことである。このやり方での一つの問題点は、学生を関心のある学科や専攻から引き離してしまうことになるかも知れないということである。

しかし、概して、非協力的な教員も、障害学生を受け持つ経験をした後は、他のそのような学生に対してより協力的になる。

教員が障害学生に協力的であるということについては、その他の面として、そのうわさが、障害学生の間にも広まるということがある。これも、問題を引き起こす可能性がある。ある教員のクラスでは、かつて、三〇人の学生のうち、八人が障害学生であった。四人がろう、二人が盲、二人が車椅子を使用しており、騒々しい音がする人工呼吸器を付けていた。事態は、教員にとっても、そのクラスの全員にとっても困難になった。盲の学生のために、教材を大きな声で読み上げなければならず、ろうの学生の

ためには、教材を視覚的に提示しなければならなかった。装置や通訳者の手配もしなければならぬ。教員は疲れ切ってしまった。

*

Q——大学の中で、障害学生に対するサービスの提供を担当しているセクションはどのようなところなのか、また、どのような人が担当しているのか？ 大学内で、どのような組織によって、そのような援助が行われているのか？ お話を伺っていると、サービスコーディネーターのような人がいるに違いないと思うのだが、どのような組織になっているのか？

A——いくつかのサービスや組織が、障害学生のための支援を提供している。障害を持つアメリカ人法のような法律がないカナダでは、普通、以下のようなことが起こる。障害学生が大学に入学し、ある種の困難がある場合、学生は、オンブズマン（問題や不満を処理するための大学の職員）や学生サービス部長（試験、休暇等のような学生関連事項に関わる管理者）のところに行くことができる。教員は、特定の学生のための調整を教授会にかけることができる。学生保健サービスのスタッフも、そのような要求を処理するのに助けとなる。学生の問題を扱うことに関して特別な訓練を受けているカウンセラーや保健サービススタッフの看護婦も、しばしば障害学生のための大学内特別コーディネーターに任命される。障害学生が必要とする装置は、四トラックテープレコーダー、画面拡大器のような障害学生用の装置であっても、他の学生に装置を配布している組織やサービスから配布されるべきである。障害学生は、「特別な」視聴覚サービスに行く必要はないのである。

*

Q——さまざまなサービスを提供している組織としては、日本でいう学生部が活躍しているようだが。

A——その通り。しばしば学生部長がサービスを提供する。

*

Q——アメリカでは、学習障害のある学生は、ときに、通常では必要とされる授業の代わりに別の授業を取ることができると聞いている。たとえば、学習障害のある学生が、数学の必修科目の試験で五回赤点を取ったので、教員は、その学生が必要条件を満たすことができるように別の授業を代わりにとることを許可したそうである（富安、小松、小谷津、一九九六）。カナダでも同じことがなされているか？

A——この質問は、私たちが障害学生のためにどんな調整ができるかということに関わっている。学生の中には、読んだり書いたりするのにただ時間がかかる者がいる。うまくいく手取り早い方法は、障害学生に他の学生の一・五倍の試験時間を与えることである。

もう一つの調整は、これである。学習障害のある学生は、しばしば書くことが困難である。私が、他の学生と同様に、彼らにエッセイを書くように言っても、できないことが多いと思う。その代わりに、他の方法、たとえば、私と一対一で、口頭で答える、あるいは、テープに答えを録音するなどの方法で試験をすることができる。

ためには、教材を視覚的に提示しなければならなかった。装置や通訳者の手配もしなければならぬ。教員は疲れ切ってしまった。

*

Q——大学の中で、障害学生に対するサービスの提供を担当しているセクションはどのようなところなのか、また、どのような人が担当しているのか？ 大学内で、どのような組織によって、そのような援助が行われているのか？ お話を伺っていると、サービスコーディネーターのような人がいるに違いないと思うのだが、どのような組織になっているのか？

A——いくつかのサービスや組織が、障害学生のための支援を提供している。障害を持つアメリカ人法のような法律がないカナダでは、普通、以下のようなことが起こる。障害学生が大学に入学し、ある種の困難がある場合、学生は、オンブズマン（問題や不満を処理するための大学の職員）や学生サービス部長（試験、休暇等のような学生関連事項に関わる管理者）のところに行くことができる。教員は、特定の学生のための調整を教授会にかけることができる。学生保健サービスのスタッフも、そのような要求を処理するのに助けとなる。学生の問題を扱うことに関して特別な訓練を受けているカウンセラーや保健サービススタッフの看護婦も、しばしば障害学生のための大学内特別コーディネーターに任命される。

障害学生が必要とする装置は、四トラックテープレコーダー、画面拡大器のような障害学生用の装置であっても、他の学生に装置を配布している組織やサービスから配布されるべきである。障害学生は、「特別な」視聴覚サービスに行く必要はないのである。

*

Q——さまざまなサービスを提供している組織としては、日本という学生部が活躍しているようだが。

A——その通り。しばしば学生部長がサービスを提供する。

*

Q——アメリカでは、学習障害のある学生は、ときに、通常では必要とされる授業の代わりに別の授業を取ることができると聞いている。たとえば、学習障害のある学生が、数学の必修科目の試験で五回赤点を取ったので、教員は、その学生が必要条件を満たすことができるように別の授業を代わりにとることを許可したそうである（富安、小松、小谷津、一九九六）。カナダでも同じことがなされているか？

A——この質問は、私たちが障害学生のためにどんな調整ができるかということに関わっている。学生の中には、読んだり書いたりするのにただ時間がかかる者がいる。うまくいく手取り早い方法は、障害学生に他の学生の一・五倍の試験時間を与えることである。

もう一つの調整は、これである。学習障害のある学生は、しばしば書くことが困難である。私が、他の学生と同様に、彼らにエッセイを書くように言っても、できないことが多いと思う。その代わりに、他の方法、たとえば、私と一対一で、口頭で答える、あるいは、テープに答えを録音するなどの方法で試験をすることができる。

その根底にある原理は、障害学生に他の学生より簡単な試験をしない、他の学生より低いレベルで合格させない、障害学生が適切な教材を学び、それを学んでいるということを示すことができるように試験の方法や必要条件を代わりのもので置き換えることである。実際、私の授業では、私は、すべての学生に筆記による試験と口頭による試験を提供している。すべての学生は、望めば、両方の方法で試験を受けることができ、私は、良い方の得点のみを考慮に入れる。

要するに、学習障害のある学生のための代替案についての私の考えは、価値の劣る課題ではなく、同等の価値のある課題を異なる方法で提供するということである。

文献

富安芳和、小松隆二、小谷津孝明編（一九九六）「障害学生の支援——新しい大学の姿」AHEAD日本会議より、慶應義塾大学出版会。



テレンス・R・ドーラン

Terrence R. Dolan

第四部

遺伝子治療の現状と将来

講座 人間と福祉 障害者とともに

教育・就労・医療の最前線

エドワード・R・スカーマルス
Edward R. Skarnulis

ジョン・クレイゲル
John Kregel

キャサリン・S・フィチテン
Catherine S. Fichten

テレンス・R・ドーラン
Terrence R. Dolan

小谷津孝明 小松隆二 富安芳和 共編

慶應義塾大学出版会

ISBN4-7664-0695-8 C0036 ¥3200E

定価 (本体3,200円+税)



9784766406955



1920036032006



講座 人間と福祉 障害者とともに
教育・就労・医療の最前線

EDWARD R. SKARNULIS
Catherine S. Fichten
John Kregel
Terrence R. Dolan
JON KREGL
TERRANCE R. DOLAN

小松隆二
富安芳和

小松隆二 小松隆二
富安芳和 共編

慶應義塾
大学出版会

講座 人間と福祉 障害者とともに

教育・就労・医療の

最前線

エドワード・R・スカールヌリス
Edward R. Skarnulis

ジョン・クレイゲル
John Kregel

キャサリン・S・フィチテン
Catherine S. Fichten

テレンス・R・ドローラン
Terrence R. Dolan

小松隆二 富安芳和 共編

主要目次

- 第一部 西欧における障害者処遇の歴史
- 第二部 障害者主導の援護就労
- 第三部 大学における障害学生の支援
- 第四部 遺伝子治療の現状と将来

バリアフリーの 社会を実現する ために

障害者支援に取り組み
アメリカとカナダの
専門家の最新報告と、
それをめぐる
一般市民との熱い対話。
〈人間〉と〈障害〉の定義を、
新たな視点で問い直す。

慶應義塾大学出版会

定価3200円+税